

室町期歌会資料集成稿―釈文と略解題―(十)

石澤一志・武井和人・日高愛子・別府節子・本山八重子・山本啓介

【緒言】

本連載は、多くが未刊・未整理のまま残されてゐる室町期歌会資料（及びそれに関連するもの）を、広く学界に紹介することを意図としてゐる。

小論では、武井蔵『月次和歌御会』に収められる三種の歌会資料の内、架蔵本以外に全き伝本が知られてゐない（ただし、部分的には他歌会資料に本文を伝える「略解題参看」）、永正四年に催行された「禁裏月次御会」十二ヶ月分の釈文を掲げ、併せて略解題を付した。

釈文作成にあたり、以下の方針に従った。

- ① 漢字は原則として通行の字体に統一した。
 - ② 丁移りを」を以て示した。
 - ③ 上句と下句の間に、一字分空白を設けた。
 - ④ 釈文作成担当者名を、当該部分末尾に（ ）に入れて記載した。なほ、底本との照合は、本山・武井が担当した。
- 小論の一部は、JSPS科研費一七K〇二四〇七の助成を受けたものである。

（武井和人）

〔1〕永正四年正月一九日禁裏月次御会始（抄）

詠梅有佳色和哥 堯胤

模濃者那丹本比磐布里奴今年誉利 色己曾安札登尚也契ら舞

―― 沙門道永

としをへてふかきにほひにさく梅の はなも千とせの春の色かな

―― 覚胤

代をへて色香かはらぬむめつほの はなをは君かかさしにやせむ

―― 沙門道応

千代をへむ雲のうへにやむめのはな さきておりしる色かそふらし

―― 仁悟

いくはるも君か見るへきためとや かねて色こき庭の梅か枝

―― 慈運

梅かよ花もわりなくいくはるの 色にそみけるにほひなるらん

永正四年正月十九月次和哥御会始

読師

講師 頭中将公条朝臣

発声

（以下空白）

〔2〕永正四年二月二五日禁裏月次御会

関路早春

湖上朝霞

霞隔遠樹

羈中間鶯

隣家竹鶯

朝霞戸さしもしらぬ関こえて 都にいそく春は来にけり

さゝ波や春にかへりて出る日の にほてる浦は霞たなひく

香具山のこすゑの春は久かたの そらにしめゆふかすみ也けり

やとからんふもとの里のしるへにも たのむ山路の鶯のこゑ

へたつなよ一夜のふしも呉竹の わか中垣のうくひすの声

邦高

堯胤

道永

覚胤

（武井和人）

田辺若菜 野外残雪 山路梅花 梅薰夜風 水辺古柳 雨中待花 野花留人 遠望山花 曉庭落花 故郷夕花 河上春月 深夜帰雁 藤花隨風 橋辺款冬 舟中暮春 卯花隠路 初聞郭公 山家時鳥 池朝菖蒲 隣蚊遣火 盧橘驚夢 杜五月雨 野夕夏草 澗庭螢火 行路夕立 初秋朝風 閏月七夕

門田ゆく雪けの水もあせつたひ 道見えそめて^わかなつむ也
もえ出る草葉のうへは先きえて かれ生に残るのへのあは雪
たれか先雪にたつねし山里の かきねの梅の春のゆくてに
夜床まてにほひもりきてかた敷の 袖のものなる梅の下風
龍田川はる行水のからにしき 神代もかくや青柳の陰^影
またさかぬ梢さひしくふる雨の 音をきくにも花そまたるゝ
あかなくのの花の下陰くれにけり 野辺の小さゝの枕かるまで
分まよふふもとの霞はれそめて よそにもしるく花をみる哉
軒ちかみなこり有明の月かけも 梢みたれの花の春風
うき物となかめし秋の夕より 花ちる比のふる郷の空
浪の音ものとかに月のかすむ夜も 水上とをく川風そふく
あかつきのたか別路をしりかほに 鳴て行らむ春の雁かね
吹風は松にこたへてさく藤の 音なき波をよする色かな
袖の色もうつりや^かはる山吹の 花のかけふむ谷のしは橋
したひこし春もなかれて川舟の 名残もとをくかすむ波哉
たとる也さく卯花の分れとも 跡なき雪のをのゝ細道
われに先音つれてけり郭公 人はきゝつといたまいはねと
此里になかてあらめやとはかりも をのか名おもへ山ほとゝきす
ひらくらむ池のあやめのたねならて 草はにかほる朝かせもなし
中垣やへたてぬ月の涼しさも かやりにくもる^宿のいふせさ
さめてうき夢をもしはしなくさめて 枕にちかく匂ふ橘
雲かゝる森のした草茂りあひて いとゝ木ふかき五月雨の比
今朝よりもみたれそまさる打なひき 夕露おもきのへの夏草
行水の音かすかなる谷かけに^も 光を見せてとふ螢かな
たひころもぬれてやゆかむ陰もなき さのゝ渡の夕立の空
秋きてもなれし木陰の朝すゝみ 衣手かるき風の音かな
天つほしのちのふ月の夜は恋て ねかひの糸やおもふすちなる

道応 仁悟 慈運 貞敦 実隆 宣胤 季経 公兼 為広 実香 季種 俊量 元長 重治 実望 雅俊 宣秀 和長 永宣 守光 賢房 公条 尚顕 為学 公音 道永 為広

野亭夕萩 江辺曉萩 山家初雁 海上待月 松間夜月 深山見月 草露映月 関路惜月 鹿声夜友 田家擣衣 古渡秋霧 秋風滿野 籬_下聞虫 紅葉汚水 山中紅葉 露底槿花 河辺菊花 独惜暮秋 初冬時雨 霜埋落葉 屋上聞霰 古寺初雪 庭雪厭人 海辺松雪 水郷寒蘆 湖上千鳥 寒夜水鳥

秋萩の花のにしきをしく袖も ゆふへ露けき野へのかり庵
色はれて入江の萩にこすなみの 音なき程や有明のかけ
谷かくれ水の蛸も残る夜に おもひつきせぬ雁はきにけり
秋の海やとをき限_もとゝめにて かすめる浪に月_そまたるゝ
雲は今松ふく風にまかせても 木間わりなき月を見るかな
夜とゝもに月こそありけれさゝのはの み山の秋の露のかり庵
秋といへはした葉のこらすをく露に もとめてやとるあさちふの月
逢坂の関路を越てかへり見る わかふる郷のあり明の月
なかき夜のね覚なくさむ鹿の音は つれなきつまの情とそ聞
露さむき小田のかりほの秋風に うつ音しきる_しつかさ衣
霧こむる淀のわたりの朝あけに 舟さす音そ遠さかり行
たへて_みむ露のこゝろはしらねとも 千種になひく野への秋風
秋さむきまかきのおくの山風に 下葉もつもる松むしそなく
紅のふちせや水の下もみち うつるかけまてふかく染つゝ
山ふかみまなくしくゝ程なれや 分て梢もみちしてけり
たつねみむおなし籬も露ふかき はかけにしはし残る朝かほ
にほふよりそのみなかみをしら菊の 露なかくる_谷川の末
一時雨そらはすきても我袖に はれぬおもひや秋の別路
昨日けふ冬にやならの葉かしはを ならしかほなるむら時雨哉
有明のかけさへ杜の木かくれに ちゝのおちはそ霜をかさぬる
風さむく更行夜半のまきのやに 音もさひしくあられふる也
岩つたひあとつけそめて櫓つむ 袖やさゆらん雪の古寺
をのつからとはれぬ庭もよしやたゝ 雪のためには_口ぬ庵に
浪の色もひとつにみほの松原や 雪に明行浦の遠かた
難波かたこやのあしふきあれはてゝ たてるかれはも霜さやく也
松のみか友なし千鳥さひしさに 志賀のうら浪立みなく也_声
おもふらん心はしらす水とりの なくねをさむみ_口やわひしき

和高 康親 堯胤 実隆 貞敦 隆康 伊長 雅俊 雅業 言綱 慈運 道応 覚胤 仁悟 宣胤 宣秀 実香 為広 季経 公兼 季種 雅俊 実望 道永 俊量 元長

歳暮澗水
 初尋縁恋
 聞声忍恋
 忍親昵と
 祈不会と
 旅宿逢と
 兼厭曉と
 帰無書と
 遇不逢と
 契経年と
 疑真偽と
 返事増と
 被厭賤と
 途中契と
 従門帰と
 忘住所と
 依窓折身
 隔遠路恋
 借人名と
 絶不知と
 互恨絶と
 曉更寢覺
 薄暮松風
 雨中緑竹
 浪洗石苔
 高山待月
 山中瀧水

山里も谷の水を若水に なとむすひかふへき年はくれけり
 さほしてをしへやすらんことゝも をみるめは今やあまの釣舟
 いひ出ぬ物からいかにそれときく をこゑをしるへの人にこふらん
 むらさきのゆかりをちかみ忍ふとて を我心をもくたく中かな
 此よとはいまは祈らす契をは をいのちの後せたのむみそきに
 明るまも猶はかなしやくらふ山 をおもふにあらぬ野へのやとりは
 かゝりさす夜川の浪を逢瀬にて をはかなくいとふ 有明の空
 いかにせむかくとも見えぬもしほ草 をあらいそな 有のかへる跡には
 いつよりかへたてはつらん草の戸を をさしもむかしはかよふ中垣
 かきたえぬたのみはかりそ言葉に をなくさめかぬるふみも幾年
 こむとしの心まよひの床中に をおくとほ夢かぬとはうつゝか
 かきりあれは我たまつさの数も今 をいたつらならぬ情かなしも
 いとふなよ身はしもなから心のみ をうへかうへにもかよふならひを
 あたなりと人やおも 有む道芝の を露のよすかも世々 有ちきりを
 同宿のなへての友とまきるなよ を夜ふかき 有門 有のこるうらみは
 消さらんおもひを宿のしるへとも をみしやいつくの峯のしら雲
 つらさにもまけす命のなからへて を逢夜はいそけ神のまに／＼
 心たにかよへはちかきかよひちを をはるけき中と 有うらむらん
 身をかへていひしになひく心をは を逢夜ありともいかうたのまん
 雲かゝる末の松山いまはゝや を越けるなみの跡たにもなし
 我のみとわれをことはる恨にや を人もまけしの心そひけむ
 見る 有夢のあたにさめ行曉を を枕にのこす月のかけ哉
 秋といひ夕をそきと山さとに をさひしさそふる松風の声
 ふる雨の音もそよきて見るか中に を緑色そふ庭の呉竹
 な 有かれてをいさしら浪やくたくらむ をさゝれ 有をつる苔もこそあれ
 さらに又むかひの山に待やみむ をたかき峯にも遅 有き月影
 雲霧のはれまやしはし山姫の を日かけにみかく瀧のしら玉

重治
 実隆
 邦一
 季経
 和長
 堯胤
 道応
 賢房
 公兼
 宣秀
 為広
 守光
 俊量
 永宣
 慈一
 季経
 実望
 康親
 公音
 公条
 実香
 伊長
 尚顕
 堯一
 宣胤
 道一

河音流清^水

春秋野遊

関路行客

山家夕嵐

山家人稀

海路眺望

月羈中友

旅宿夜雨

海辺曉雲

寄夢無常

と草述懷

と木と

遂日懷旧

社頭祝言

(一行分空白)

(以下空白)

③永正四年三月二十五日禁裏月次御会

詠三首和哥

喚子鳥

花纔殘

初逢恋

あさき瀬は底さへ見ゆる河水に うきもをかけと魚そよりくる

みれつむゆかりの野へか紫に これも色こき藤はかま哉

行かへる人こそたえね玉ほこの 道ある時に逢坂の関

山にてもよその夕にきゝそなす あらしにしつむ入り相逢の声

まれにたに人のとひこぬ山かけは あるしまかはぬ柴のか^り庵

天津風春ふく空ものとかにて 霞にとをき興の釣舟

行かれて月を友なる草まくら 夢さへとはぬ夜こそなかけれ

ふる雨やかことかゝれる草まくら 旅はもとよりほさぬ袂を

明石かたしほ風晴て曉の 空も浪路の月そさやけき

跡とをきおやのいさめはうたゝねの 夢に待みる一^箇もなし

いさゝらはおはなかもとの露けさも おもひある身の袖にくらへん

雪霜の世にしほれける心には みさほつくりし松もかひなし

昨日といひけふとくらせる身の上に きゝしむかしの忍はれそする

みかさ山めくみを春の木のめにも さかへむ陰を猶祈るかな

永正四年二月廿五日 勅題

隆康

雅俊

仁一

永宣

雅業

言繼

実隆

覚一

重治

元長

和長

為学

邦一

(石澤一志)

おもひねになれぬる夢の契りには なるへくもあらぬ新枕かな

端作同

中務卿貞敦親王

よふこ鳥鳴ても行か山ひこの こたふるかたに声をかはして
たつねきて青葉をわくる胡蝶をも 花のかすにやなして見るへき
へたつたと行末おもふ契りにそ 越てくるしき逢坂の山

春日同詠

正二位実隆

のとかなる春をしらせて万代の こゑをも山の^よふこ鳥哉
なかめきて春の日かすもさはかりと 木間の花におとろかれぬる
よし野川いもせの山のなかにみよ 落そめてよりいつか絶ける

権大納言藤原宣胤

この山のさほのうちなるよふこ鳥 よそにこたへて川風そふく
もとめきて風なさそひそちるかうちの 青葉につゝむ花の名残を
しるやいかにこよひ袖つくさ夜衣 ひきはなれぬもなれぬ心を

権大納言藤原政為

いたつらに春も過ぬとよふこ鳥 たかあらましの山になくらん
梢にはありやなしやと見る花の 色かをふかみ残るさへうし
新枕たのむにかたき心かな うきとし月は人のまことを

民部卿藤原為広

こたふるもそれとはなしやよふこ鳥 うつる羽買の山ひこの声
したひわひ恨むとすれはかつ咲し 木すゑにかへる花の面影
身のよそにきかむ逢瀬か聞わかぬ 声をよすかの宇治の川浪

右近大将

実香

あはれともきく人あれなよふこ鳥 よしのゝおくの花のよすかに
花の木はみとりの色を吹からに 苔のはしろき春の夕風

権大納言

季種

山も又のとけき春とよふこ鳥 その名に立て誰かそふらん

枝に見る花もこてふのすかたにて 色かは夢が残るともなき
今宵さへしたふ心はこしかたに たにゐ。まぐらの明ほのゝ空

権中納言——元長

こたふるも誰かはきかむ山ひこの 同しこゑなるよふこ鳥哉
残るとは青葉かくれに見えねとも 風にしられて花やちるらん
今宵こそ逢といふ時は思ふことの いひやられぬもしりはしめけれ

兵部卿源重治

春の山。いつくはあれとよふこ鳥 声きく時を先や分みむ
面影を青葉にのこす花もはや こてふとゝもにちりまかふらん
なからへてあれは逢夜の玉のをゝ つれなき物と何かこちけむ

権中納言——実望

とはゝやな誰をかさてもよふこ鳥 忍ふの山の忍ふとはなし
咲そめしなめにかへる木すゑ哉 青葉かおくの花の面影
夢としも猶わきかねつことのはも うち出かたくかはす手枕

権——宣秀

雲かすみまよふ山路のよふこ鳥 よひかはしてや友としるらん
ちり残る梢とみれば更に今 かつ咲そめし花の面かけ
限ありてけふ越そむる逢坂や すゑもあふ みと後を頼まむ

権——雅俊

うつるらんをのかすかたやよふこ鳥 かゝみの山のかけになく也
よそにたにたれありともしらんちり残る 青葉かくれの花の色かは
こよひこそ越てうれしき逢坂や なみたを袖に せきしとゝめは は

参議菅原和長

山ひこのまけぬこゝろはきゝなから 何よふこ鳥しりて鳴らん
春は先梢にはやく暮跡に のこるもはなの色香さひしき
あかす人つらき心にかはるなよ 今の契りをならはしにして

——藤原永宣

山ふかきかすみかくれのよふこ鳥 さひしき春をたれにつくらん
日かすをもちへす物にて咲そむる 花とも見はや残る一枝
いとふをは人にうらみし身の程の さすかにつらきうの枕かな

――左大弁――守光

はなもはやちりぬる山のよふこ鳥 なにしとはれむ物となくらむ
ちりのこるかたみの花に此まゝに わすれて風のさそはすもかな
いひやらて涙はいとゝ新枕 かはす袂にほしやわひぬる

――右大弁――賢房

あまひこの声をしるへによふこ鳥 こたふる人も見えぬみ山に
ちりはてし花をもあたに猶残る 花や花をもあたにみるらん
こよひこそかはしそめける言葉に さのみ恨の程はつゝまし

藏人頭右中弁――尚顕

をろかにも誰をかしめてよふこ鳥 こたふる声もきかぬ山路に
したひしもいく程かみむちり残る 花と春との日数な^かれは
恨こしそのかす／＼も新枕 なさけ一夜にわすれぬるかな

少納言菅原為学

山ふかみかすみの中によふこ鳥 こゑきく人や道たとるらん
ちり残る花をしるへとたつね入 山さくら戸の春に木ふかき
おもひそめし心の道をしるへにて あひみる夜半の月はくもらす

左近衛権中將――康親 ※「一」、右傍ニ藍色ノ不審紙貼付セラル

さ^らてたに見はてぬ夢のよふことり また夜をのこす夢の枕に
咲わくる風たになくは青葉にも 花もありとやしられ過らん
よしやたゝありし恨もまたなれぬ 身にはとつゝむ新枕かな

――少將――隆康

分入もまた程とをしおく山に たれよふこ鳥声しきるらん
残るさへ猶あやにくのよるの雨に 青葉そしるき花の一本
うちつけにいま一たひのたのみゆへ 逢夜はおしき哀なりけり

内蔵頭一言綱

雲かすみ^わけ入山のよふことり 誰しるへとかなく音なるらん
ちり残る花はまれなる木すゑたに さすかに匂ふ春の夕かせ
つれなくて過し月日もかきりあれば 露のちきりをかはしそめぬる

(一行分空白)

永正四年三月廿五日月次和哥御会

(一行分空白)

詠三首和歌

堯胤

たつきなき身をいつかたによふこ鳥 よはふ山もとみねの松風
山^山桜みしやおもかけは木々の ありとはかりにのこる花かな
逢事はまくる恨をはしめにて かくさぬ中^にならむとすらん

同

沙門道永

山ひこはよそにこたへてよふこ鳥 おなしなくねを又やまよはん
今朝そ見し青葉のそこにうつもれて ちりをくれたる花の名残を
言葉も今夜なみたの水くきに ひころつくせる心とをしれ

覚胤

たか名をか心あてなるよふこ鳥 またみぬ人の春の山路に
かす／＼の花しおもへは一本に のこるもまれの山さくらかな
おもひねになくさめきつる年月の 夢は今夜や枕^枕たつぬる

沙門道応

さそへたゝよしのゝおくのよふこ鳥 すくわけ入らんしるへするまで
ふりそはむ今はあらしのつらさに たゆる木かけの花の雪哉
から衣かへさてこよひへたてなく ほの見しそめし夢もはつかし

慈運

分まよふ春の山路の花にけふ 我をもさそへたれよふこ鳥
咲そむる色かに見はや残るさへ 青葉にふかきはなの一枝

(日高愛子)

わすれしと契りそめてもいかならん 心の色の我に見えずは
(以下空白)

(武井和人・山本啓介)

4 永正四年四月二五日禁裏月次御会

春色

夏色

秋色

なひきあふ柳桜の八重かすみ 春のにしきも中はたえけり
青柳のわつかになひく糸よりも うちへ春の色は見えける
さきあへぬ八十の衢に起塵も 春をむかふる色にもれめや
春は先花ともいはしあさみとり かすみにそむる明ほのゝ空
口なしの色にも咲て行春を おしとやいはむ山吹のはな
千々の色にそむる心を春はたゝ 花ひとつにもうつしてそみる
のとななる春の色より染はてゝ さくらに匂ふ四方の空哉
色ふかき空のみとりもわかぬまで かすみにこもる春の明ほの
春の色をいつとかみむきえあへぬ みきはの氷空の白雲
いかにそめいかに織けんさほひめの 心を春の山にとはゝや
こきませし桜やいつく夏来ては 青柳のみの四方の色哉
光あるかさり車の玉すたれ かけてあふひそけふを時めく
あかす猶むすひなれては涼しさを 色なる水にそむ心かな
夏くれは色こそまされ春日野や なへてみとりに見えし若草
あさはかの我言葉もくれなゐの ふりいてゝさけやまとなてしこ
朝戸あけてまかきになひくなてしこの 露浅からず色にめてつゝ
おほつかないかにそめてかくれなゐの ふりいてゝさくやまとなてしこ
偽やならのはかしは春かけて まことに夏の色のすゝしさ
心あれやさゆりのはなは夏の色の 火にかたとりて咲出にけり
たまふてふ扇の風にたくひなる 草はの色そ見えて涼しき
花にさき露にそめなし草も木も 色のちくさや秋につくせる

邦高 堯胤 道永 覚胤 道応 仁悟 慈運 貞敦 実隆 実香 宣胤 政為 季経 為広 季種 実望 俊量 元長 重治 雅俊

冬
色

露霜はをくとも見えぬ白菊の　はなもうつろふ月の夕暮

あたなるを色に咲ける槿の　花のうへをは露にみせつゝ

かけうつすにしこそ秋のそめ色の　山のみなみも紅葉しにけり

いつれとかわきておらまし秋のゝや　ひと色ならぬ花も千くさに

紅葉する梢を見てそ秋の色に　そめし心のふかきをもしる

いかにしてあるよりも猶青葉をも　又色かへて秋はそむらん

うき物と身にしむ露やそめつらん　もみちは色に出てみせける

草も木もをのさま／＼紅葉して　野山そ秋の色をつくせる

そめしより浪も色なる紅葉ゝは　にしきをあらふ江にこそ有けれ

あはれけに見しはさなからうつせみの　人めもかるゝ時そかなしき

さすとなき草の戸さしもむすほゝれ　霜をきわたすまへの棚橋

おもかけのちくさなからに霜雪の　色のみかれす見ゆるのへかな

降雪のこしのしらねも薄雪の　色にとられてくるゝ空哉

時雨行嵐の空のたえ間より　さすや日影もさむき色哉

ましりてもはなやもみちにあらそはぬ　松は冬をとさむき色哉

冬かれの色さへさむき草の原　猶いかなれと霜のをくらん

さむき夜のしもをかさねて月影も　くもらぬ色に山風そふく

よし野山わすれぬ花のおもかけを　同じ梢にみする白雪

冬くれは秋みし花のさま／＼に　ひとつ色なる霜の下草

花になく初鶯の声はかり　われうち出む言葉そなき

今朝は猶たかねの日影長閑にて　雪け落そふ谷水の声

雁かへるすかたは消て霞ゆく　雲路に残る明ほのゝ声

名もしらぬ鳥の声のみかたらひて　哀しつけき山の春哉

春の野にをのかさま／＼声す也　妻とふきゝすあかる雲雀も

沓のなるあらはしりの雲の上に　この殿うたふ月そさえ行

分のほる人こゑとをくかすむ日に　さかりもしるや花の山ひこ

物の音もなひく柳のはなそのや　しらゆふかよふ春風そふく

宣秀

和長

永宣

守光

賢房

公条

尚顕

為学

康親

堯胤

実隆

政為

為広

雅俊

和長

公音

隆康

伊長

言綱

道永

覚胤

道応

貞敦

宣胤

政為

為広

夏声

秋声

冬声

春香

ふる雨ものとかにかすむ色くれて 入逢のかねのひく遠方
百千鳥さえつる春のはつねもや をのか名にたつ鶯の声
端居してあつさを夏の日くらしに たつ蚊のこゑも物そかなしき

閑伽たなのしつくのまゝに隙しなき 音にもしるし夏の山寺

夏山のみとりの木々はわかねとも よそにしらるゝ松風の声

山里にまたれずきなく郭公 こゑきゝてこそ住かひもあれ

山かけやあらぬ岩ねもおちたきつ ひゝき音する五月雨の比

萩のはに心もかすなく雁の なみたわりなき露の上かな

野辺の虫尾上の鹿の声にこそ 秋をあはれのかきりとはしれ

かけさむき霜夜の月の浅ちふに 秋や限の松むしの声

おもひわく身にこそとまれ秋の声 樹のまにありとも誰かいひけん

やすらねぬ近衛の夜めくりも よなかき比やしけくきくらん

秋きぬといはてもまたき身にしむや 軒はの萩の夕風のこゑ

なくしかにみえつはいつれ秋のおもひ 心にしりて音をたてすとも

萩のはに吹朝かせの秋きぬと 見せもきかせもさやかなる声

残らしと聞し野分の跡にしも こゑはしほれぬ虫そ鳴よる

秋風のこゑもあまたによはるらし をのかさま／＼なひく草木に

下萩のしはしつれなき陰をたに 松にやねたむ木からしの声

くれゆけは嵐にまよふ狩こゑも 猶所せき鳥立なるらし

もろきをは木のはのみとや透らん 見はてぬ夢に残る松かせ

きくもうし紅葉。ちりてつれなくも かたみかほなる木枯の音

山風はうつもれはてゝしつかなる 谷にひくや雪折の声

軒はもる月をも袖にかたしきの 夜床は梅のにほひのみかは

さしむかふ日影ほのめく朝露に 花の香しめる袖の春風

心ある袖にくらふの山人も なるれは同じ花の匂ひを

吹すくるあらしのよそにさそはれて 匂ふともなき梅の木の本

雪のしたに忍ふかとみし梅かゝも あらはれそむる春風そふく

季種

康親

邦一

堯胤

実望

季種

雅俊

道永

仁悟

慈運

実隆

宣胤

実望

俊量

重治

宣秀

賢房

堯胤

元長

守光

尚顕

邦一

慈運

季経

実望

俊量

俊量

夏香

秋香

冬香

一とせはいかにこかれる花も今 枝にあまりて匂ふ春かせ
 ありとある花にかすとも梅かえや 猶あまる香のふかく残らん
 梅かゝよいかなるたねそ咲とさく 花に匂はぬ風はなけれど
 春風のさそひつくさはいかならん 枝にもおなし梅かゝそする
 春の色のかすみてふかき山風に さかぬ木すゑも花のかそする
 袖ふれてうつしと見は^め蓮葉^はの 朝露きよき花の匂ひを
 おり待てかほるあやめもたちはなも 同し五月に心ひくらむ
 ふきすてし軒の板間のかれはをも あかすあやめの香は残りける
 あやめ草はな橋にさ月こは 匂ひをわけて時やしらし
 はなにそむ人の心はあた物の この世のほかと匂ふ蓮は
 かつ見ても色をはそれとわく花の 匂ふやいつれ野への秋風
 秋風やひとつにほひにさそふらん 野へはちくさの花と見ながら
 霜までとにほひをくらん長月や 末しら菊の花の上の露
 年へても老せぬ君かかさしとや 雲井の秋に匂ふしら菊
 朝露にぬれておもへる白菊の ひるまあやしく匂ふ袖哉
 にほふきの二葉をいはゝ藤はかま 草にもこれやたくひなるへき
 花も葉もをきそふまゝに色かへて 霜こそにほへ秋のしら菊
 一とをりさそふはよはき秋風に ふかき匂ひをゝくるむら菊
 白菊のうつろふ花の色はあれと をく露さへそ猶匂ひける
 影たかき月のかつらのよな／＼に 光もにほふ四方の秋風
 霜とちて秋の色みぬませのうちに たくひ。なしや匂ふしら菊
 夜をさむみ柴たきすさふ袖のかや おもふともなき名残とむらん
 軒ちかみ春待梅やたきものゝ にほひあはせてまたき咲らん
 匂ひさへそれかとはかり雪の中に わひてや梅の春を待らん
 乙女子や天の羽衣かく山に またかきかほり雪のはなふる
 (一行分空白)

永正四年四月廿五日 出題為広卿

重治 宣秀 永宣 公音 隆康 道永 道応 仁悟 政為 公条 邦高 覚胤 実香 元長 和長 永宣 伊長 言綱 為学 貞敦 実隆 為広 季種 雅俊

(以下空白)

(山本啓介)

〔5〕永正四年五月二五日禁裏月次御会

御製

海辺郭公
遠村蚊遣火
竹風如雨

時鳥^あかすとかきく苦屋かた 花も紅葉もい^まの一こゑ
此里や山をもおつるかやり火の けふりのうへは峰のしら雲
村雨もよそには過す竹のはに 吹やむ程の風にまかせて

式部卿邦高親王

行衛なきうきねの浪に郭公 山をいつくと鳴てすくらん
よそならぬ麓のましは折佐て かやりたてそふ山陰の里
ふり出る雨を枕に聞わひて おきいてゝみれは竹のさ夜風

中務卿貞敦親王

舟いたすいそへの山のほとゝきす たれに名残をおもふとかきく^な
かやりたくけふりのすゑや山もとに こりゐる雲と成てみゆらん
葉分もる月影ながら降雨の 身にしむ音や竹のさ夜風

正二位実隆

あま人もなみのよる／＼ほとゝきす わかなの里^もに心かくらん
たきすさふ夜のかやりのうす煙 峰しろくあくる空哉^{から}
くれ竹の窓うつ音はくらき雨の 葉分さやけき月の下風

権大納言藤原宣胤

山ちかき須磨の浦はのほとゝきす 浪とゝもとに声そまたるゝ
いつもたく遠山もとの柴ならて くるゝけふりや里の蚊遣火
風の音も袖をそぬらす村竹や 雨ときゝなす老のね覚は

権大——政為

海こしの山ほとゝきす鳴すてゝ 行かたしるやかへるしら波
色かはるよそめしるしかやりたく 煙のうへにみゆる梢は

すなほなる竹のは風も偽の　あるかせしらする雨の音哉

権大——季経

あまのかるみるめはかりはうとくとも　なけ時鳥浪のよる／＼
下くゆるかやりたつらし夏木立　煙にしつむ遠の一むら
いくたひかぬれぬたもとをかつくらむ　雨かと聞し竹のは風に

民部卿——為広

郭公むへ心あれ夕なみの　たちてみゐてみ松かうら嶋」
むらとをみもしほの煙たてそへて　すまのあかりにわふや蚊の声
あしから^らやあしとき雨は晴てさへ　□れぬ音きく竹のした風

権大——季種

きゝわひぬ心うかれてほとゝきす　浦こく舟の^ほのかなる声
をちかたやなひくけふりの消あへす　夕けにつゝく賤か蚊遣火
風わたる竹をは雨になしはてゝ　さやけき月に窓にあやしき

権大——実望

とをつ人さそなまつらの浦かけて　なけやひれふる山郭公
くれゆけはかやりのけふりむら／＼の　里のしるへとなひく色哉
音たつる葉分の風のそよ^ふくに　ふらぬ雨きく竹のした庵

按察使源俊量

しら浪のたちかへりなき海こしの　山ほとゝきす程とをくとも
うきわさをかこちかほにもかやりたく　煙をみする里の遠かた
たちいてゝぬれぬはかりそ風の音は　雨なりけりな軒の呉竹

権中納言藤原元長

浪風のこゑは残りてほとゝきす　いつくとまりと鳴て過らん
かやりせぬやともこそあれひとつ色に　煙よこきる遠の山本
草の庵に音なき雨の音するや　まかひもはてぬ竹のさ夜風

兵部卿源重治

しほくまぬたひねの袖も郭公　哀うちそふる須磨のうら波

山もとやかやりののけふりたてそへて かへりもやらぬ雲かとそみる
くれ竹の葉風なりけり月かけは くもらぬ雨の窓をうつ音

権中納言藤原雅俊

郭公をのれも空になのりそを あまのかるてふかたに鳴也
かやり火やたきつゝくらん夕けより けふりをたゝぬ遠の一村
おつるともしつくは見えぬ村雨の 音うちさやく竹の下風

権中———宣秀

又も来て忍音をなけほとゝきす あこきの浦とよしやしるとも
遠山のふもとのけふり村／＼にたか軒はにもたつかやり哉
呉竹のそよくさ枝は雨とのみ よこきる風の窓をうつ声

権中———菅原和長

あまのすむ里のしるへに郭公 なをうらみよとつれなかるらん
蚊のたつもまつ一むらの夕けふり 末にたくひの里は見えつゝ
舟つなく入江の竹のさ夜風に ふらぬ雨きく月のさひしさ

左衛門督藤原基春

心なきいは木の山のほとゝきす いくよこぬみの恨てかまつ
かやりたく煙たてすははるかにも しつかすまゐの哀をは見し
竹のはに風うちそよくたくれを 雨ときくにも猶そさひしき

参議———永宣

時鳥なくねはつくせからさきの 松は一木のこすゑなりとも
かやりたく遠の里人ねぬよはも 月にうき名のたつ煙哉
さ夜風にふらぬ雨きく竹のはの そよくにさむる夢もこそをし

参議左大弁———守光

うみこしやむかひの山のほとゝきす 待夜の舟にかりこたへせよ
夕月のくまもさこそと一むらの 山もとくらき蚊遣火の影
いかにして袖はぬれそむ呉竹の 雨ならぬ風のまとをうつにも

参議右———賢房

遠さかる声そきえ行ほとゝきす 浪のうへなるあはちしま山
雲まかふ遠山さとのかやり火は わきてけふりの色も^わかれす
一むらの竹のさ枝をふく風は ふりもとをらぬ雨とこそきけ

参議右近衛権中将公条

時鳥なみたそえてや過つらん さらてもほさぬあまの衣に

一むらのほのかに見えて里人の すむとはかりやかやりたくらん
今朝みれは夜のまの雨やいかならし 露も残らぬ竹の下かせ

藏人頭右中弁——尚顕

いさよひの月もあかしのうら波に さそはれ出るほとゝきす哉
一むらの里のをちかたかやり火の けふりを色にくるゝさひしさ
雨とのみおもふはかりそ枝おもき 露吹はらふ竹の下かせ

藏人頭左近衛権中将康親

〔あつまやの^{前酒}須磨の浦や〕明行なみに心あらは 名こりをとめてなけほとゝきす〕

あつまやの軒はのかやり焼すてゝ 月待いつる遠の里人
吹たゆむ風はさなからくれ竹の 夜はのまくらをすくるむら雨

少納言菅原為学

かり枕うきねことゝふほとゝきす 浦山かけてこゑやおしまぬ
たくれはかやりのけふりたてそへて 月にやうとき遠の里人
うちそよく竹のはわけの風の音を 窓うつ雨にきゝまかへつゝ

左近衛権少将藤原隆康

夢さそふ浦はの浪をかこちしは くやしかりける郭公哉
たてそむるしつかかやりのけふりより はやくもくるゝ山本の里
風わたるまかきの竹のそよ^ふくに 雨かときけはをく露もなし

藏人右少弁——伊長

きかてはやいく夜あかしのうら浪に まきれてすくる山ほとゝきす
かやりたく千里の空の夕けふり とをきや雲のよそめなるらん
今朝みれは露さへをかて雨とのみ おもひし音や竹のさ夜風

左近衛権少将源雅業

立かへりなくねともかなほとゝきす あかぬ名残のしかのうら浪
〔遠村蚊遣火〕歌闕

ふる雨の音にそなひくくれ竹の わかはの露にかよふ夕風

内蔵頭藤原言綱

浪間よりなきてきにけり郭公 いそのとまやに枕かる夜は
山本のしつか蚊遣のけふりにや くもらぬ月もおほるなるらん
ね覺して雨かときけはくれ竹の 末葉の風の窓をうつ声

（一行分空白）

永正四年五月廿五日 月次和歌御会

（一行分空白）

堯胤

にほのうみのむかひの山も遠からて 沖ゆく雲よ鳴ほとゝきす
よそに見るあはれはかりやをくかひの 誰軒はより夕さりの空
月もいま岡辺の竹の小夜あらし いかにほとふるむら雨のこゑ

沙門道永

すかたをは見るめもからぬ夕波に なをほとゝきすあはち嶋山
夕すゝみ此里ならぬかやり火の けふりのすゑそいとふともなき
竹のはの露もさなからむら雨の けしきを見せてしほる朝風

沙門道応

あかしかたなにゝたとへんほとゝきす 鳴て過行跡の夕なみ
たか庵のしるしにかたつ山本の かやりのけふり杉の一むら
窓くらき雨は下はのそよさらに 竹よりくるゝ山風の声

沙門仁悟

郭公わか待かたにつれなきは ことうらかけて忍ひねやなく
かやり火のけふりたてすはすむ人の ありとも見えし遠の一むら

（本山八重子）

いくたひか雨の音して過ぬらし 竹のすゑはをわたる秋風

慈運

伊駒山夕こえきてや難波かた かたふく月になくほとゝきす
かやりたくさとのけふりや山風に 消ゆく雲の色のこすらん
夜もすから窓うつ雨はくれ竹の 葉わけの風に月のもる影

〔6〕永正四年六月二五日禁裏月次御会

春たつ日
のこりの雪
わかな
あをむま
やよひ
衣かへ
うの花
神まつり
あやめ草
なこしのはらへ
はつ秋
たなはた
十五夜
こまひき
こゝぬか
神な月
しも月
かくら

打はへてけふあら玉のとしのをの なかきを春の光にそ見る
春あさき朝日かくれの山さとは かきねをさむみのこるしら雪
袖さむみにほふともなき春風の はなのゝわかな雪もつむ也
春の色もみはしにするき白馬の ひさしき代とのためしにそひく
宮／＼の幣にかさしのふちさくら 南まつりの日やめくるらし
香をたにと猶うつせみのから衣 かへても花のわすれかたみに
外にみぬ月をそれかとうのはなの さけるをたとる木との下道
神まつる卯月のみしめ一すちに それとみむろの山かつらをり
ちかやふくむかしの宿を忘れすは ねなから軒のあやめをもみん
みたらしや浪もなこしのはらへして かへるさすゝし水の夕かせ
秋かせそ猶おとろかすひとゝせの なかはの夢も昨日とおもふに
天川いつかけそめてかさゝきの はしめとなれし逢瀬なるらん
てりそふや月の半の秋をへて 猶十五夜の空そ名にたつ
ひくこまのいさみある世と仰きつゝ むかしを今にかへす袖かな
千ゝの秋めくるもあかし九重に 八重さく花の菊のさかつき
秋の色のかはらすなから神無月 おなし雲まや猶しくるらん
天乙女たえぬためしを更に又 むかしにかへる神のしら雪
きゝたゆる事をそなけくきり／＼す うたひし秋の糸竹の声

邦 仁 實 宣 堯 實 貞 為 道 政 道 覚 季 実 慈 雅 季
高 橋 香 胤 風 隆 敦 広 永 為 應 風 種 望 運 俊 經

(別府節子・武井和人)

仏名
 としのはて
 あまの原
 てる日
 みか月
 ゆふやみ
 ほし
 あらし
 むらさめ
 しつく
 ちり
 なる神
 やま河
 いはほ
 そま
 をか
 むまや
 秋の田
 そほつ
 春の野
 大たかゝり
 みやこ
 くに
 ふるさと
 かきほ
 となり
 かと

たのむそよ三世の仏をとなへては つみものこらぬ年やくるらん
 くれ行をしたふとならばさもあらで 又こむとしもまたれすはなし
 蟬のはの袖さへたえすあまの原 いかにてる日の三か月の影
 山遠くなかそらはれてる日には さはらぬ雲の峯たにもなし
 夕くれは槇の戸口のやすらひに さす程もなきみな月の影
 ひかりても。道やたとらぬ夕くれの やみはあやなしと行蜚かな
 夕やみの星のはやしのすゝしさも 月まつほとにあかぬ夏哉
 身にしめてねさめの枕きゝわひぬ 松のあらしのさ夜ふかき声
 雲は又はるゝともなき村雨の 先一とをりはや過ぬらん
 み山川みなかみとをきてみれば 岩ねのしつく木ゝの下露
 はらはてそ見るへかりける床夏の 花のちりなき今朝のしめりは
 山とをく降も過るもなる神の 音にきこゆる夕立のそら
 せきいるゝ庭のなかれもやかて又 すゑはひとつの山川の水
 影ひたすいはほの苔の色よりや 夏なき水の碧そふらん
 くれぬれはそまひきすてゝ行人の くだすいかたや月にさすらん
 水茎のをかのくすはの秋風に うらめつらしき露の白玉
 袖もこそふりくる雨はしのつかの むまやのすゝのさ夜ふかき声
 うきわさにねぬ夜なわひそ小山田の 庵もる月も心ありけり
 心たれ法にはひかむかりの世に てら田のそほつおとろかしても
 わか草のみとりかすめる春のゝは あさをく露の色もわかれし
 山こゆる鳥のおちくさ残る日の かけもすくなくかりくらしつゝ
 なをさりにたれなかわらんいひしらぬ 都の山の月の明ほの
 うかひいてしあはち鳴ねのあきつすの 四方にうこかぬはしめなるらん
 住すてし宿はあれ行庭の面に 今もおとつる軒の松風
 しけり行かきほの荻に音つれて こぬ秋風そかねてすゝしき
 三度うつす心にもしれ一事も こはあしからしとはかりのやと
 月出る夕は人を松の門 さしてたのめし事はなけれと

元長
 俊量
 重治
 宣秀
 基春
 和長
 守光
 公条
 賢房
 永宣
 堯一
 邦一
 尚顯
 康親
 政為
 道永
 実隆
 為広
 為学
 公音
 実香
 道応
 伊長
 雅業
 宣胤
 隆康

おきな
おや
てら
みつ
みせき
しからみ
やな
にはたつみ
うたかた
しほかま
こひ
かたこひ
おもかけ
ひとりね
なみた
うらみ
いはひ
わかれ
たひ
物かたり
むかしを^三ふ
むかしあへる人
おもひわつらふ
なき名
かくれつま
玉くしけ
もとゆひ

としをふるおきなゝみの白雪は あはれきえせぬ物にやあるらん
をろかなる我そかひなきたらちねの いさめし事は忘れはてねと
鐘の音にありとはかりは白雲の たなひく山のみねの古寺
谷ふかみ岩まの水のをとたてゝ あたりの木かけ露そすゝしき
山河の下水水はせかれても みせきをこゆる瀬々の岩浪
年ははやなかはにちかきみそき河 日なみなかれてしからみもなし
はやせ川やなこす水のわきかへり うきてなかるゝ浪のしら泡
雨はるゝ蓬かもとの庭たつみ それかとはかりすめる月影
なかれてもつきぬは水のうたかたの あはにむすへる滝の糸筋
あま人のたくものけふり立浪の ほかにくもるやうらのしほかま
わすれしの契に^を人にたのめても あはすはたえぬ恋やうからん
あひおもふ事やなからん世ゝまでの たえぬ恨を人に残して
ひとりねとうらみははてし我身とも そふや夜床の人の面影
しきしのふ人こそなけれすかこもの とふしかくふし独ねの床
うき数やまつさきたちて袖の上に おほえすおつる涙なりけむ
秋風にうらみかちなくすのはも うき身ひとつのうへとこそしれ
おきふしのいはふことはつもの数も 君か千年のいまそしりぬる
しとふとてたちわかれすはそれそ先 心になふ命なるへき
うかりつるみちしおもへはなをさりに おもひていてし旅そくやしき
人のうへにかたりなしても哀なる おもひのぬしよ誰とかはしる
たちかへり身のいにしへをおもふには うきをも忍ふ世とやなるらん
あひみしもしまはむかしといふはかり なからへて待人の音つれ
うつろはむことのはならははつ草の うらなくともいかゝたのまん
しらせはやなき名とり川なかれても 身は埋木の朽はてん世を
人しれぬ我はたきぬのかくれつま いく夜かさねてあく時のあらん
我こゝろさしてくもらぬ玉くしけ 三途をはふたけとそおもふ
たれもみな君につかふる契りをや 初もとゆひにむすひこめけん

覚胤 季経 仁悟 言綱 慈運 俊量 元長 季種 雅俊 実望 貞敦 重治 宣秀 道永 守光 公条 和長 賢房 実隆 邦一 宣胤 基春 為広 実望 堯一 政為

しほやき衣
あふき
かさ
みの
つと
くれなゐ
むらさき
みとり
にしき
あや
はなかつみ
さねかつら
あゐ
まさき
ひかけ
みくり
なつむし
ひくらし
てふ
たけ
むめ
しゐ
すき
かし
しきみ
からす
かほとり

あはれいつをのかひまとかあしのやの　なたのしほやき衣ほさまし
手にならずあふきに見えてこぬ秋の けにはさやかに風そすゝしき
雨にきるかさはあれとも袖ぬるゝ　涙に老はかくれさりけり
山みちは露もしつくもふる雨に　みのゝたもとやしほれそふらん
これそのみやこのつとゝおもふにも　月は程なき須磨のうら浪
かさしつる花のにほひや残るらん　大宮人の袖のくれなゐ
すみれつみ真萩さくまで同しのゝ　おなし色にもめてきぬる哉
うすくこくみとりはかはる松竹も　おなしちとせや君にちきらん
文にたにあひ思程はしられしを　織やにしきの色に見えぬる
秋まちておるはた物やたなはたの　手にもをとらぬあやをなすらん
かつみ草その名におふる沼水の　あさからぬ花の色も匂ひを
岩かねの露をかさねてさねかつら　くるしかりけるかり枕かな
たねはそのあゐよりいてゝ藍のはの　一しほふかき色としもなし
おく山はまさきうつろひなくしかの　なみたしくるゝ比そわひしき
雨すくる夕の空の日かけ草　かけるふ露の色そすゝしき
よそにのみ身を筑磨江のみくりなは　くるしや浪の埋れこし世は
をろかなる人の心は夏むしの　火にいる夜のおもひにそしる
夕間暮月また遅き梢より　時雨ですくるひくらしの声
野へみれはちくさの花を吹風に　ならふ胡蝶もみたれてそとふ
さかへゆく陰をこそまて竹の園　その名も代々の徳をかさねて
春やいま北にむかへる窓の雪　にほふとみれは梅咲にけり
霜さやくしゐのはさむき山風に　かたしく袖や色かはるらん
山のはに入日は残る影ながら　くれゆく色や杉のむら立
霜雪の色をきながらしらかしの　うらはに見せて山風そふく
大原やふかき涙のさめ板は　しきみにぬれし山路かときく
夏の夜のまたよゐながら見る月の に　からすなきたち空そ明行
たれにつけて見よと鳴らん春日野や　花のけはひのかほとりのこゑ

実香　道応　俊量 為学　康親　季経　尚顕　季種
重治　道永　実隆　元長　覚胤　永宣　為広　基春　伊長　隆康　邦一　公音　政為　雅業
有注　宣秀　堯一　言綱　和長

かさゝき

久かたのほしの契にいかなれば わたしそめけむかさゝきの橋

雅俊

(一行分空白)

永正四年六月廿五日 出題政為卿

(以下空白)

(別府節子)

7 永正四年七月二四日禁裏月次御会

御製

袖にをく光もすゝし夕月夜 さや^ひになひくおきの上風邪

早涼
野虫

秋の野の花にましりて鳴虫の 松は色なき物としもなし

尋恋

かけてしもおもはぬふしよ竹しけき 陰をちきりに尋ねよる身は

式部卿邦高親王

いつのまに待こし袖の初かせも 身にしむ秋のつまとなるらん

なく虫の声の色をも花の上の ひかりにそふるのへの夕露

いかにせむそことは行て尋ぬとも さもあらぬ人のこたへなりせは

中務卿貞敦親王

吹かはる音はそれともわかねとも 秋にすゝしき袖の上かせ

色^かはる露をよすかに鳴虫の なみたやあまるをのゝ浅ちふ

いかさまにたつねもゆかむ契こし 心の杉もしるし見えす^は

正二位実隆

から衣おり過けらし蟬の羽の うすさおほゆる秋のさ夜風

たかならぬ野らの秋を松虫の わかみひとつの色香とや^なきく

おもはすはそれそなけきのつくは山 わくるにさはる道はなくとも

内大臣実香

おほつかな露ちりそめてならのはの そよたか秋と風の吹らん

秋ふかき草の下ねになく虫の なみたあらはす野への夕露

たつ^ねても恨やそはむ立かへり 行ゑしらせぬ契りなりせは

権大納言藤原宣胤

すゝしさも今はことはりとはかりに 日数そひ行秋の初かせ
わくる野の草にはしはしなぬまを 待て又きくすゝむしの声
あくかるゝ心はかりはいそけとも 猶すきかてのたとる宿かな

権大納言藤原政為

袖の露かゝらましとはおもひこし 秋風ながら身にそおとろく
鳴むしのおもひのみかはねにたてぬ 野守か庵も同じ夜さむを
夢とたにあはぬはうしと思ふ身を 先たとらする野^のへの道芝

権大納言藤原季経

きくからに袖そすゝしさ秋の色は ほにあらはれぬ萩の上かせ
したひきてわくる野へ哉風の上に そこともしらぬ虫のなくねを
忘れぬ露のやとりをたつぬれは 袖こそぬるれ人はこたへす

民部卿藤原為広

いつまで。秋^かを心の松風も 身にしむ程の月のすゝしさ
暮ふかみわくる花野の露ながら 色にみたるゝ虫の声／＼
とひ侘ぬ風をたよりの家嶋や 跡なき浪の行ゑいかにと

権大納言藤原季種

すゝしさはみとりの空の一しほや 秋にうつろふ露の夕くれ
しはし猶きくへき物を分るのゝ 草葉の露ときゆる虫の□□
かきりなくしたふによらは人心 をしへぬ宿も猶やたつねん

実望

いとはやも身にしむ風の音信よ 昨日けふこそ秋はたちしか
野をひろみこゝそとゝへはこし方に 又松虫の声きこゆなり
いつまでかまよひもゆかむ吹風の たよりもしらぬ人を尋ねて

按察使源俊量

秋きては昨日けふかとたとるまに おもひもあへぬ風のすゝしさ

野へことにをのかさま／＼なく虫も　ひとつおもひの秋をしれとや
まよひ行恋路いかにと尋ても　心のほかにしるへやはある

権中納言——元長

はつ秋の夕の空に夏の夜の　ふけてもしらぬ風そおほゆる
わけくらす秋の花のゝかへるさに　鳴て我をや松むしの声
たつねわひいまそくやしき　イックトモいはてわかれし心まよひはに

兵部卿源重治

さゝのはの忍ひにすゝし松高き　外山よいかゝ秋の初かせ
分ゆかは袖やしほれん虫のなく　さかのに残る露のふる道
忍ひわひ猶さたかには我さへも　契らぬ宿をなにと問まし

権中納言藤原宣秀

すゝしさの今朝はことなる袖の上に　秋のくるをも身にやしるらん
野をひろみ千種はあれと夕陰の　くつの小すき虫そ鳴なる
しらせはやそことさたかにいひをかぬ　人のつらさの道のまよひを

権——菅原和長

しのはれし夢には遅き涼しさの　はやくも秋の初風の声
かゝる世にわれことしけくねをなかは　野への虫にもおとりやはする
をしへけるいまたにまとふ尋ても　あはてかへらん道はしられし

左衛門督藤原基春

まこも草おふの川原の夕波に　秋もよりくる風のすゝしさ
われからや夕しほこゆるなるみ野に　藻にすむ虫と侘て鳴らん
身をうちのはかなき夜半のかひまみも　はてはあたる契りなりけん

参議藤原永宣

吹かはる音ともなくてすゝしきは　秋こそ風の心なりけれ
秋やこれ鹿なく山は紅葉して　花さくのへに松むしのこゑ
あやなくも行てそかへる道しはの　露のゆかりを尋ねわひぬる

参議左大弁藤原守光

今朝よりの秋たつ風のやとりとて 先音すゝし庭の萩原
つれなくてたれかはすきむ秋のゝや まねくおはなに松虫の声
いくたひか同じ道をもしそくらむ 見しおもかけを恋のしほりに

――右――賢房

夏衣きのふも同じ風の音 袖におほゆる秋は来にけり
すむ人も見えぬ野はらの古寺に たれをこなひの鈴虫の声
恋の山猶まよひなはいかならん 我身しほりの道しありとも

――右近衛権中将公条

秋は先桐の一葉のうへとのみ みれは身にしむ風の音かな
野への色はまた霜をかぬ秋風に 我ゆか遠きむしの声哉
分まよふ袖よりかすやそへつらん をしへぬ宿の道芝の露

藏人頭右中弁藤原尚顕

萩のはの外にも音のきこゆるや やとりさためぬ秋の初風
見るもきくも心そとまる秋のゝは 花のいろ／＼虫の声／＼
ちきりてもをしへはをかゆ杉の門 何をなさけのしるしとも見し

少納言菅原為学

今朝そらや残るあつさも白露の をきそふ色にみゆる秋^かと
ひろき野ををのかやとりに鳴虫の 心よいかに露の草むらゝ
おもひあまる心は空にあくかれて ゆかりを問もなみた落つゝ

藏人頭左近衛権中将藤原康親

秋きぬとおもひはあへぬ夕たに さすか身にしむ萩の上かせ
露さむき小野のあさちに月更て よはるときくも茂き虫の音
待わひてたつねゆかむも今はゝや なかゝるましき秋の夜の空

左近衛権中将藤原公音

立はてゝ昨日かまちし秋風の やかて身にしむ夕暮のやと
おもふこといひもてゆけは「むしの音^{？上音}秋の夜も」 あかすとやなく野へのむしのね
たつぬとも露はしらしな草の原 一夜にゝたるやとりありやと

※コノ歌、小字ニテ補入サル

左——少将——隆康

いつしかとはや秋風の萩のはに　みたるゝ露の色そすゝしき
夕まくれ真萩さくのゝ露の底に　鳴出る虫の声そ色そふ
たのみしはたか偽そ三輪の山　しるしも見えぬ杉の下道

藏人右少弁——伊長

あつき日の名残すくなく昨日けふ　涼しさをくる秋のはつ風
まくす原たれを恨てななき夜を　音に鳴あかす野への松虫
わかれきて月日へたつるうき中は　いかにたつねてめぐり逢へき

内藏頭藤原言綱

草も木もまた色見えぬ露の上に　をちてすゝしき秋の初風
秋のゝにちくさの花の咲そひて　虫もいろ／＼の音をや鳴らん
偽にいひもしらす尋きて　をしへし道に猶まよふかな

(一行分空白)

永正四年七月廿四日 月次和哥御会

(一行分空白)

堯胤

夜ころへてとしけちてし光まで　なとむつましき閨の秋風
我からや野を分て鳴海かた　藻にすむ虫は音をたてぬよに
かねをたにおもふしるへにきゝかへて　をしへぬ里に別をそとふ
(以下空白)

8 永正四年八月二五日禁裏月次御会

立秋天
こと日
こと風

夏の日のおも影いつら今朝はゝや　行かふ空に秋風そふく
何をかはその色とみむ峯の雲　日影におなし秋やたつらん
聞わひぬ世のはけしきもけふに明て　昨日にかはる秋のはつ風

実香
宣胤
為広

(武井和人)

と雨
 と露
 初秋曉
 と雲
 早涼至
 待七夕
 七夕夜深
 と月
 と雲
 と霧
 と河
 と橋
 七夕衣
 と舟
 と後朝
 曉露
 故郷と
 袖と
 蘭と
 夕萩
 荻破夢
 山居萩
 野萩
 行路と
 水辺と
 女郎花
 と露

草も木もけふふる雨にをく露の めくみあまねく秋やたつらん
 今朝はゝや夏をへたてゝしの垣の しのに露ちる秋風そふく
 かたしきの床の初かせ身にしみて 秋そねさめにおとろかねぬる
 萩のはに音信そむる声もなし 雲よりつくる秋のはつかせ
 河風の夏をもしらぬ柳かけ ちるや一葉の今朝のすゝしさ
 おもふにも先身にしむやたなはたの ちきりにたのむ秋のはつ風
 逢瀬さへほとなく更て天河 ふかきおもひにうきしつむらし
 夜を残す月にわかれをさきたてゝ 見る空もなき星合の空
 一とせを待たりつゝ天河 雲のうきはしけふやかくらむ
 天河けふたなはたのあふくまに 霧たちわたるおもひそふらん
 中たえぬ契りありとも衣／＼の うき瀬よいかにあまの河浪
 天河もみちを橋にいつそめて 逢瀬の秋の色にかけゝむ
 一とせを中へたつるたなはたの 衣はなにのをれるなるらん
 たなはたの心にかよふ手向かも 同じ名にあるあまの川舟
 おもひやるけさそかなしき天河 逢瀬まれなる年の渡りを
 ね覚するたか枕より置そめて 野への草はは露けかるらん
 すむ人の跡たに見えず故郷の あるゝまかきは露にまかせて
 袖よいつ露のやとりにかしつらん われとはしらぬ秋の夕暮
 山風のすそのゝ露も白妙に うつろひそむるふちはかま哉
 きゝわふる風こそあらめ夕露を はらひもあへぬ軒のした萩
 又見るも見はてぬ夢となりぬらん 萩にも風のいくかへにして
 さひしとは何かきかまし山陰の すまゐにかなふ萩の上かせ
 夜もすから鹿なくのへの萩かはな さそな泪の露もをくらん
 真萩原たれわけきてか道のへに 風なき露もみたれそふらん
 行水にうつろふ色の見えなから さかり久しき野への秋萩
 まくすはふ野へに露けき女郎花 たれに恨の色をみすらん
 露はなとなひく心そをみなへし 花こそよはき姿なりとも

道永
 季経
 雅俊
 覚胤
 道応
 貞敦
 季種
 実望
 実隆
 慈運
 邦高
 堯胤
 俊量
 元長
 仁悟
 宣秀
 基春
 重治
 守光
 和長
 大納言
 典侍
 公条
 康親
 為学
 賢房
 為広

岡薄 薄似袖 荳蔻乱風 虫近枕 籬下虫 野と 雨夜と 蜚思 曙初雁 雲間雁 風前と 旅宿と 雁過湊 朝鹿 原と 麓鹿 海邊と 遙聞と 江鶉 沢辺鳴 秋田風 とと露 とと雨 秋夜長 駒迎 浦秋夕 秋夕雲

かり残す岡への薄たか秋の 恨にたえてほにし出らん
 風わたる夕の野への花すゝき ほのめく月をまねく袖□な
 誰ゆへととへとしのふのみたれには 風も吹あへぬ野へのかるかや
 ともにさてはらはてやねん草の庵に 虫の音むすふ露の手枕
 山と見る草のまかきの陰しめて やとりとるとや虫の鳴らん
 千種さく野へにあまたの虫の音は 花に心を分てなくらし
 むしのねはかすかになりていと猶 草の庵の雨そさひしき
 きり／＼す野山にふかき露霜を さなからかたる手枕のこゑ
 うら風のまさこちひろく立鳥の 数より見えてあくる波哉
 きつゝなく宮古も旅の空そとや うきたる雲の衣かりかね
 やゝさむき衣かりかね声なへて きぬたもちかき里の秋風
 都にはいつかきかましかりまくら 今夜こしちの初かりの声
 なれのみそ声をほにあげて舟つなく 湊江とをく雁の立そら
 明ぬとて山路にかへる鹿の音の 名残身にしむし朝霧の空
 つま恋にかよひなれつゝ草の原 とふまでもなき鹿や鳴らん
 真柴つむまかきのふもとくれそめて 袖よりそよく棹鹿の声
 浦浪のよる／＼聞もあはれなり いそ山もとのさをしかのこゑ
 タくれは峯こす風やさそふらん つまとふしかのとをさかるこゑ
 まのゝうらや入江のおはな咲ぬらし かねなて波にうつらなく声
 沢水の影さへくれてたつ鳴の 羽音はかりをそれかとそきく
 荳蔻残す小田のいなはの吹しきて 鳴子にさはく秋の夕風
 夕露のおくてのいなは一むらは またそめ残す色に見えけり
 荳のこすいなはの雲もむら／＼に 雨ふりすさふ秋の山もと
 虫うらみ秋風さむみ夢にさへ まきれぬよはを何とあかさむ
 又もこむ秋をちきりてもち月の こまひきいつる逢坂の山
 しほかまの浦は夕もいかなれや 秋のけふりのわきてさひしき
 時雨きてかへる夕の雲にこそ 秋のあはれの色はみえけれ

莚胤 実香 実隆 道永 季経 雅俊 尚顕 堯胤 邦一 公音 伊長 季種 実望 俊量 道応 隆康 言綱 為広 雅業 仁悟 元長 貞敦 重治 宣胤 和長 慈運

と風 待月 月出山 契秋 禁中月 花洛と 古寺と 閑屋と 水郷と 池と 海辺と 江と 滝と 橋と 庭と 苔上と 月前遠嶋 とと扁舟 月前旅 閑見月 独対と 擣衣幽 連夜擣衣 里とと 遠村霧 閨と 河と

うき事も我身ひとつの夕かと 袖にしほるゝ秋風の声
心をはをくるやいかに秋風も 月まつ程の露のほか口は
千ゝの秋も光かはして夕くれの 月やときはの山をいつらん
長月と月もいくよの秋をかも ちきりて空にすみまざるらん
くもりなき我君か代を雲の上の 光に見せてすめる月哉
いつくにもたくひやはあるくまもなき 月をみやこの秋の夜の空
人なくて独ひらける松の戸に 月やいく夜の法のとしひ
やすらはゝ月や戸さしにあかさまし あれ行ふはの閑屋なりとも
我心したにかよひて恋しさも みなせの月のいにしの空
水にやとる限もしはし見まくほし 月のためなる広沢の池
月やたゝ心ありてはやとからん しほくむあまの袖をもとめて
月は先入江に遠き山のはに いてゝもくらき芦の一むら
山風の声すみのほる月影に よるとは見えぬ滝のしら糸
かゝるへき雲をおもふもあやうきに 月に越行きその梯
見るかうちの心の塵も払はなむ 月かけみかく庭の秋風
いつれわかしきのふ世のうへならむ 月の席に苔のむしろは
なかもやる絵嶋かさきの秋の色も 名にあらはるゝ月の影哉
こき出るあしわけ小舟さはりなく 雲もはれたる浪の月かけ
おもはすもいそく心にまかせつゝ 月にそこゆるさ夜の中山
更行や人はしつまる暁の われのみむかふ月のさやけさ
おもふとち見るとしならは何かさて こよひの月に心残らん
夜をさむみあはれいつくそ秋風の 音をもそへてうつ衣哉
秋風は猶身にたえすあさ衣 うちもたまぬ夜をかさねても
秋風をうらみはてゝやあまのすむ 里のしるへに衣うつらん
ちかゝらぬななめの末の里までも 夕さひしくまよふ霧哉
鳥かねをしるへにあくる閨の戸の 夜ふかき色にまよふ朝霧
あさな／＼うちの川浪霧こめて 舟さす袖や猶しほるらん

宣秀 道永 基春 寛胤 実香 季経 実隆 雅俊 俊量 大納言 典侍 守光 公条 賢房 邦高 堯胤 康親 公音 仁悟 尚顕 実望 慈運 伊長 雅俊 季経 元長 言綱

梯と

霧隔帆

山路菊

河辺と

尋紅葉

薦とと

初紅葉

雨後とと

紅葉遍

松間紅葉

紅葉瀉水

暮秋露

とと霜

故郷暮秋

九月尽夕

ととと暁

(一行分空白)

永正四年八月廿五日 勅題

朽にける谷のかけはしあやうさも 霧のまよひにみる程はなし

明わたるうら浪とをく立霧に まほもかたほもわかぬ色かな

仙人のすみかもこゝ。とはかりに きく咲にほふ谷のした道

さく菊の花もうかひて谷川の 水上おもふ秋の久しさ

さめあへぬ山はもみちのかり衣 ぬれて時雨の色もかひなし

山里の岩垣もみち枝もなし つたのかつらのかゝるはかりは」

はつ時雨そむるを見せてときは木の よそに色わく峯の紅葉ゝ

初時雨ふり^みふらすみ行雲の むらこにそむるよもの紅葉ゝ

心をは野山にとめて色ならぬ 袂もなしや秋のもろ人

松風の染いたしてや吹わくる 木のま見せたるみねのもみちは

山ふかき梢の色になれきて 秋もおくある谷川の水

むしのねも枯野の秋の今はとて わかるゝ道の露そ色なき

をく霜の小さゝにさやく音までも 名残さひしき岡のへの秋

苺あくる田つらさひしく行秋の 名残露けきなか岡の里

おしみても今はの秋のけふのくれ かねも心をつくすこえ哉

ともなひて行秋なれや九月も 夢もそかへるあかつきのそら

和長

雅業

宣秀

道永

実隆

為学

堯胤

為広

基春

道応

隆康

貞敦

重治

邦高

宣胤

〔9〕永正四年九月二五日禁裏月次御会

河霧未晴

紅葉透松

対月懷旧

霧のうちはわたるせいつくひろせ川 袖つく程のみかさまさりて

霜の後時雨のあとの木ゝの色も 松の葉こしは^きめもつくさす

月やしるをのか世ゝなるおもひ出を はるかに忍ひちかく恋つゝ

式部卿邦高親王

明日香川あくる夜しろき浪の上に 霧の淵瀬そ見えてなかるゝ

(武井和人)

うつろふやさらにまかはぬ色ならん　松はこなたの山のもみちは
いにしへの事をあまたに忍ひきて　ななき夜あかぬ月のもとな

中務卿貞敦親王

はれまをや待てくたさむこく舟の　行せにたとる秋の川霧
あらし吹松の葉分のうす紅葉　あらはれそめて行時雨哉
なかむれはしらぬ昔をさそひくる　月やいく夜の秋のおもかけ

正二位実隆

さすさほの雫もさむし朝霧は　また夜やふかき宇治の川長
松のははもみちを人にねたしとや　木のまあらはす風もつれなき
月よなと世ゝのおも影さそひこと　ちきらぬ空のかきくらすらん

内大臣実香

あふくまのわかれやおもふ夜をのこす　色をしはしの水の秋霧
岡のへの松うちけふる木のまより　こかれて色ににほふ紅葉ゝ
なかくめこし身にさへかはる世の秋を　おもふにさそな月のむかしも

権大納言藤原宣胤

嵐ふく峯より晴て山川の　水のけふりに残るうす霧
色こきもさたかにはなし松か枝の　たえ間ほのかに見ゆる紅葉ゝ
過ぬるとしはいくとせこの月の　在明うとき老のつれなさ

権大納言藤原政為

秋風にたつ川きりのつれなさは　なかるゝ浪もさそふとはなし
もみちするなにとはわかす松のはの　へたてははてぬ色にてりつゝ
今ははやみし世も遠き身の秋の　空行月にたれしのふらん

権大納言藤原季経

とはゝやなすみた河原の秋霧に　わか友ふねもありやなしやと
山里の軒はの松よなひかなむ　みねのもみちはさやに見るとて
ふるさとのむかしの秋を。出て　しくれぬ月にぬるゝ袖かな

民部卿――為広

秋ふかみたかねは雪に明る夜を 麓に残すふしの川霧

吹わくる松の木のまに見えて^{より} あらしや時雨みねの紅葉ゝ
むかし猶忍ふもくるし月といへ□ 見まれ見すまれ老か身の秋

権大納言藤原季種

たつ霧に音きく浪やおほる川 むかふあらしの山ははれても
うつもれぬ秋の色を枝かはす 松の葉分のもみちこそみれ
なからへていく秋月になれぬらん おもへはとをき身の昔哉

権大納言藤一実望

河風にたつ朝霧のひま見えて ほのあらはるゝ淀のつき橋
おもかけはまつの木のかつ見えて 紅葉おくある秋の山哉
月のみやむかしなからのかけならん うつれはかはる世をおもふにも

按察使源俊量

浪のうへ朝日にむかふ山もなし うちの川。霧^{瀬は}ふかくして」
秋風のしくるゝ音もよそならて 松の木のをそむる紅葉ゝ
むかしにもかはらぬ影としたひくる 老のこゝろや月はしる□^(ら應)ん

権中納言藤と元長

昨日見し夕霧なからたひ人の 朝川わたり猶まよふらし
紅葉にも又いとひける木のま哉 月のくまなるみねの松はら
あちきなくもとの身なから身にそしむ わか世ふけゆく月の秋風

兵部卿源重治

明わたる遠かた人の袖の色も 猶見えわかぬうちの川霧
一むらの松の葉分に山ひめの にしきをり出る峯のもみちは
なめわひし昔もさそとよもきふの 軒はの露にすかる月影

権中納言藤原雅俊

秋ふかき山はあらしに明そめて ふもとの浪にまよふ河霧
露しくれいかにもりてか下紅葉 つきなき松にいろをわくらん
つく／＼とおもひのこさ^ぬ秋^はの夜は 月にむかしのかけやそふらん

権中納言——宣秀

みな渚とふかくたちぬるあすか川 あさせはいつく水のうす霧
松をもる夕日の影のくれなゐも 木のまに見えててる紅葉哉
今見るもむかしかはらぬ月なれと 我身にふくる影やそふらん

権中——菅——和長

さほかはや浪はあけてもかつらきの よるとはかりに朝霧の空
よそよりは見えすく枝も色そこき 松を時雨のみねの紅葉ゝ
いく世ゝの人をかしらん秋の月 我むかしをはいはてこそみめ

左衛門督藤——基春

吹すさむかせのうへにや河霧のこゝをせにとも立わたるらん
露霜もおくある松の木のみより さていくしほのみねの紅葉ゝ
遠さかるむかしかりのあはれをは 月もやしるととふ人もなし

参議右大弁藤——賢房

たちのほる水のけふりも猶そひて はるゝまおそきうちの川霧
しくれにはつれなき松もももちする 色に梢にえこそへたてね
むかしにも月やかはらむ所から 見る人からの影とおもへば

参議右近衛権中将公条

夕霧のいさなふなみに今朝も猶 せかれてくらきせゝの網代木
紅葉ゝに今一しほの色なれや くれなゐくゝる松のみとりは
おりしもあれ物おもふ宿の月影に いかなる笛のこゑをそふらん

藏人頭右中弁藤——尚頭

舟下す音はかりして朝またきかよふも見えぬ宇治の川霧
時雨にもつれなき松の木のみより もみちはよその色を見せけり
忘れても月を見るにそおもひ出る なれしとしふる秋の夜の空

藏人頭右近衛権中将康親

はれやらぬ川瀬のなみの霧のうちに 舟出やいかにうちの里人
色にこそつれなくとてもよそに今 もみちを松のへたてやはする

身の秋のうらみはをきて遠き世を 空行月に何忍ぶらん

少納言菅原為学

河上やはれまも見えぬ朝霧に やすらふ舟の数もしられず
秋ふかき松のしづくのそむるかと 木のまにしるき峯の紅葉ゝ
ものいはゝいかにとはましいにしへを おもひいてゝもむかふ月影

左近衛権中将藤一公音

秋はゝや川音さむく立霧の はれぬおもひやうちの里人
紅葉ゝも松よりおくの入日影 見えてすくなき色そてりそふ
千ゝに物をおもへはとをきその世にも 月やなみたにやとりきぬらん

藏人左少弁藤一伊長

たちいてむ道もおほえすあくる夜に また霧ふかき河つらの里
吹わくる松の木のまにうすくこく 風の見せたるみねのもみちは
おもかけもいまは残らぬいにしへを 月ひとりとやいつもすむらん

左近衛権少将源雅業

舟くたすかけも波間の朝霧の はれぬおもひやうちの里人
露時雨そめえぬ松の木間より われのみ秋のみねのもみちは
見ぬ世たに身にしのはるゝ秋の夜の 月はむかしを忘れやはする

内藏頭藤一言綱

はれまなく立そふ秋の川霧に わかぬや舟のゆきゝなるらん
時雨にも松はつれなき木のまより ほのめく色やみねの紅葉は□
見るまゝに月に落そふ泪かな むかしをかけておもふよな／＼

(一行分空白)

永正四年九月廿五日 月次和哥御会

(一行分空白)

堯胤

川霧のまたよとむまに朝日影 たかせは棹の音はかりして
辰田山あゐより出るくれなゐは 神代もきかす松のむら立

誰ならぬ老を見せても秋の月　とる手物うき鏡とはなし

沙門道永

河浪もたえ／＼見えて宇治橋の　あやうき末や霧わたるらん
色そゝふ入日の嶺の松か枝の　木のまかはらぬ峯の紅葉ゝ
見るたひに月にそ忍ふ思ひ出の　なき身かなしきいにしへの秋

覚胤――

誰となき別もかなし明ほのや　よとのわたりの秋霧の中
陰ふかき松のは山の夕つくひ　もみちやおくに猶てらすらん
むかる見る影はこの夜も更にけり　月にむかしのことかたるまに

沙門仁悟

はれやらぬ水のけふりに立そひて　霧のみふかき秋の朝川
秋やをる木ゝのもみちの下そめに　松をあやなる山のにしきは
いにしへの秋をや誰も忍ふらん　月を見るたに物わすれせて

慈運――

河音は霧にむせひて明渡る　空とも見えぬ浪の遠方
時雨行あらしの末の夕つく日　松の葉分のみねのもみちは
見るかうちにむかしおほゆる月影は　いかにすみ行心なるらん
(以下空白)

10 永正四年一〇月二五日禁裏月次御会

山早春
浦霞
摘若菜
雪中鶯
戸外梅

時しらぬ山と見えす春のくる　霞を色のふしのけふりは
たつのな□春のうらわの夕なきに　浪は音せすたつ霞かな
消かてに残る雪よりわかなつむ　跡はかれ野に見ゆる寒けさ
鶯のなくねもさむしさきちるも　にははぬ花に枝うつりして
夜のまにも梅咲ぬらし松の戸を　たゞくはかりにかほる春風

実香
宣胤
道応
貞敦
為広

(武井和人)

夜梅 池柳 野春雨 帰雁幽 花洛春月 独待花 遠尋 花慰老 漸散 名所春曙 庭菫菜 沢雲雀 岸歎冬 江藤 三月尽 旅首夏 岡卯花 郭公声近 雲外時鳥 郭公稀 採早苗 浜五月雨 嶺々々 里廬橘 夏草滋 滝下蛭 嶋瞿麦

春の夜の哀をそふる色よりも 香こそと梅の匂枕に
 春風の吹しく池の水鳥や あしのいとなみ青柳の糸
 下もえの野へは霞のあさもよひ 昨日もおなし春雨の空
 かすみにはまよふかいかに別路の 露けさしらぬころも雁かね
 月もいま都にめくる遠山の おもかけならふ春をしるらん
 さくらはなさかはとこそは契りつれ 待間をたれにかたりあはせむ
 しらせはや山また山の雲分て またみぬ花につくす心を
 誰か老にかさしそめてかさかりなる 花をは春もやつしきぬらん
 かこたしなさそはすともちりそむる 日数いまはの花の春風
 曙の千里はれゆく浪まにも のこるかすみやあはちしま山
 庭の面に下もえ出根。みねと 紫しるくさく菫かな
 水とりのそれかとそ見る夕ひはり あかる野沢に影をうかへて
 よしの川よしや世中はなちれば 又咲かはるきしの山ふき
 驚のある入江の松の夕かすみ 雪にそかゝる春の藤浪
 とゝめえぬけふの名残をしたふ□や 世のならはしと春はしるらん
 もろともに行旅なから夢もきぬ 昨日の春にけふはをくれて
 卯花のまかきをとへは雪の中に 先あらはるゝ岡のへの松
 またきかぬ遠かた人に郭公 とひてしはしそ待もなくさむ
 都にとこよひ山路のほとゝきす 夕ある雲にわかれてそなく
 時鳥したふいまはのみな月の 雲のいつらに声のこさまし
 夕日影のこる程なき小山田の 早苗とるてや猶いそくらむ
 五月雨はかよひちたえて塩浜の ならしかほにも浪や行らん
 よそもやはありともみゆる峯の庵 雲とちはつる五月雨の比
 りの名はとへとこたへす住人も むかしとはかりにほふたちはな
 ことゝはむ野守か庵も夏草の しけみか露に秋やかよふと
 山かせにみたるゝ滝の□ら玉にし光かはしてとふほたる哉
 夕露もわきてやむすふ川しまの 波間にみゆるなてしこの花

邦高 実隆 道永 堯胤 政為 季経 上臈 俊量 季種 仁悟 実望 元長 慈運 重治 雅俊 和長 宣秀 守光 公条大納言 典侍 永宣 尚顕 公音 康親 伊長 言綱

※歌題傍記、「遅」歟

船納涼 村夕立 社夏祓 行路初秋 織女後朝 故郷萩 閑居薄 寢覚荻風 叢露 海霧 田家鹿 杣月 閑と 栢月 浪上と 浅茅と 夕初雁 聞擣衣 雨後虫 渡紅葉 降とと 残菊匂 泊秋暮 杜初冬 時雨知時 河時雨 橋下落葉

風わたる入江の浪に舟とめて すゝし^さあかぬ芦のむら立
山とをき里一むらは夕立の 雲のこなたに残る日のかけ
神やしる君かちとせを祈てふ 賀茂の川瀬のけふの御祓は
行袖は千ゝにやもろき露ならむ おつる一葉の桐の下道
今朝のまをいかにかこちて七夕の きふの秋をなめわふらん
花はなをふるえの萩の色に出て むかしを残す庭も露けし
まねくらむ心そしらぬ花すゝき いつれを道の蓬生の宿
それとなく見えつる夢の余波さへ 露けき物を萩のうは風
あちきなやそれともわかぬむら草の 露にもとまる人の心は
しほかせのきりもひとつに曇きて たちもわかぬ興つ白浪
山もとは門田のをしねをしなへて 鹿のなくをやちかくきくらん
杣やまのかりやあらはにかけ晴て 月に心の猶やひくらむ
閑守も今夜は月に心せよ 行とまるへき影ならはこそ
露時雨そむる林のほかならし 月のかつらの秋の光も
秋の風水をくたき玉とちる 光は月のおきつしら波
よな／＼の月の契りも浅からず あさち色つきむすふ露哉
来る雁の数もわかれぬ夕くれの 雲のはたてに月そまたるゝ
たかさともわか為とてや打ころも 音こそよその哀ともなれ
雨すくる野もせの花の色よりも なを松むしの声そまたるゝ
夕日さすさほの渡のはゝそ原 うすきもふかき秋の色かな
もみちはのかつちるうさやわれ人と 心へたてぬ中のあしかり
庭はあれてまかきに匂ふ一花や 名残の秋の露のしら菊
難波かたうきねかなしき浪の上に 秋も一夜のとまりなるらん
今朝はゝやしのたの杜も冬きぬと 千枝は^にはけしき風の音哉
雪も又ほとやなからん冬きぬと 時雨にみする雲の寒けさ
あすか川瀬の^を水の心にて 空に時雨の降かはるらん
ちりかゝ^る木のはのうつむ浮橋は 板間にあるとたとるあや^う□^さ

隆康 為学 雅業 為広 道応 邦高 実隆 堯胤 道永 宣胤 守光 実香 政為 貞敦 季種 上臈 俊量 仁悟 雅俊 元長 実望 慈運 季経 重治 和長 宣秀

※歌題「栢」字、「枯」歟

籬落葉 篠霜 閨霰 沼氷 竹雪 原雪 積雪 湖水鳥 湊千鳥 炭竈煙 歲暮近 初恋 忍々 聞々 見々 憑々 遇恋 恨々 増々 頭々 変々 祈々 隠々 厭々 別々 恨々 松雪玉集洞松

千しほまでそめしま^かきの紅葉々も もろきはつらき夕嵐かな
 一とをりあら[□]音して[□]さ々の うへにこほれる霜のさむけさ
 板まさへ[□]はあはぬ^り床の上に ぬる玉あられみたれてそ[□]る
 夜をわ^かねむすふと見るも行水の あさかの沼のうす氷かな
 積りては風ある竹の雪もおし あたらひかりの玉もくたけて
 分し野に見しやあらぬと松はらの かけ行道はふる雪もなし
 なをさりにつもりし程そ石も木も 今朝はわかれぬ庭のしら雪
 いかに猶いさりたきあかすかたゝ舟 よるのおもひを鴛の鳴らん
 みなと江や氷のうき洲風こえて たゝよふ波にたつ千鳥哉
 つれもなきいろをけふりのよそめにて 雪にもしるき真木の炭かま
 それにしも名残やはなきさえくらす いまはのとしの雪も氷も
 おもふよりしちのはしきかきもあへす やかて逢夜^をのかそへしらはや
 おもひわひぬ涙の色のすり衣 忍ふといひし末はいかにと
 いひよらむ便にきかは吹風の 身にしむ色もよしや頼まん
 おもふとはしらぬをやかて面はゆく うちむかはれぬ程のをろかさ
 人心うきやはかはる身にしみて よし後の世と何たのむらん
 たちかへりたちなむ名をもおもふにそ 逢夜の袖のさらにひかたき
 さすか人おもひやしるといくたひか おなしことをもうらみかけゝん
 なをさりにおさへし程の涙をも いまはくち行袖に忍て
 うちわひてはらはぬ床のちりの身や あらはにあたし名にもたつらん
 たれもこのたのむにかたき世中を おもひかへさぬ身をやうらみん
 あへすなる人の秋には神垣に ゆふかけそふるくすのはもうし
 そことしもをしへぬ宿を問ゆかは かくれなき名よ誰を恨ん
 つらさをはいとふとも猶恨みむ とはれすとはすならむ限は
 うきながらなくさみやせむ消わふる 思ひを人につけて別は
 あさはかに待夜更ぬる恨しも 今はかたみの袖の月影
 松にふく嵐は雨の雲ふかみ 夜の月なきほらのうちなかな

雅業 尚頭 為広 言綱 実隆 雅俊 堯胤 仁悟 道永 政為 邦高 俊量 慈運 宣胤 宣秀 大納言 典侍 貞敦 実香 季種 公条 道応 元長 実望 道永 隆康 実隆

洲鶴 巖苔 釣漁 狩獵 遊女 樵夫 晚鐘 曉夢 眺望 述懷 無常 神祇 釈教 祝言

なかれすの色もわかれぬしらつるの よそめは浪とたちまかひつゝ
いく世をかかさねきつらん苔ころも かくるいはほのふかき緑は
沖津嶋を□のか家居か夕日影 さすかたとをきあまの釣舟
けたものゝ心をさそな□の上に あらぬみかりの跡。しる代は
たれもよの浪のうへにや海士の子の たゆたふ舟をよそにやはみん
友なはて□□をくるゝ山人は われのみ老のさかやくるしき
鐘の音にけふとくらしして飛鳥風 たゝいたつらの身をいかゝせん
世中の夢こそうけれ手枕に 見はてぬの□を何したふさん
たつのなく霜夜の朝日影さえて しつけき浪にうかふ遠嶋
のこりなくきこえあけはや雲の上に 吹つたへぬる松風のこゑ
山を蔵し川にのそめるひと時も たゝ雲水のあはれ世中
くみてしる人もやたかき石清水 かくこそ神のすめる心を
空に見よ風にうかへる雲水の 隔てしらぬむねの月影
くもりなき月日をさして君か代の ひかりもそれとあふく空哉
(一行分空白)

永正四年十月廿五日 出題雅俊卿

(以下空白)

為学 伊長 重治 和長 為広 永宣 政為 邦高 季経 堯胤 公音 康親 上臈

11 永正四年二月二十五日禁裏月次御会

湖千鳥 遠嶺雪 初逢恋

御製

さゝ浪や鳴やちとりも山の井の あかてわかれし友したふらん
われなれや都の時雨みねの雪 おなし雲井にふるかひもなき
さ夜枕又もかはさぬ夢な□は 身はならはしのおもひもそゝふ

式部卿邦高親王

「二字分空白」かゝる八十のみなどの浪のまも なくや千とりの立さはくらん

(武井和人)

残る夜の有明の月の光まで 山のはさむしみねのしら雪
うれしさをつゝまむ袖の涙こそ ならひもしらぬ逢夜なりけれ

中務卿貞敦親王

しかの浦や浪の立みになく千鳥 見るめもしらぬ妻やこふらん
雲間よりさたかに見えて曙の 色にと。れぬみねのしら雪
□こそあれいのちのうちの逢事を またとたのむも定なの身や

正二位実隆

夜をかけて海ふくひらの山風に 夕なみちとりたつ空もなし
野辺は今^うちゝるほと薄曇 はるゝをみればみねの初雪
行すゑをいかに□□し思ふにも あまりわりなき小夜の手枕

権大納言藤原宣胤

尾花ちるまのゝ入江のさむき日は うつらの床に千鳥鳴也
見るかうちに晴行あとは雪なやれ かさなるみねのおくのしら雲^(ま)
あれは逢瀬もこよひ初瀬川 ふかきちきりの末をたのまん

権――――政為

誰きけとしかの浜松風さえて 友なし千鳥声うらむらん
吹をくる嵐をはやみ雲かへる 夕もわかぬみねのしら雪
おもひきてあらぬちきりをさ夜枕 身はかさねてとえやは頼まん

権――――季経

更行はしかのうら風猶さえて さゝなみとをく千鳥鳴こゑ
けさそみる宮この西の山高^(み)□ あらしのうへに積る白雪
のちせ山後もたのまむしる柴の かりにむすへる露の手枕

民部卿藤原為広

菅浦やさらぬ塩津の浪の上に をのれ^(み)□ちたる村千鳥哉
心あれやさえし嵐の末の松 まつら^(ん)□物とみねの初雪
逢夜はの道のさゝ原そよさらに 今身を宇治の山風のこゑ

権大納言――季種

まのゝ浦や氷をさむみさ夜千鳥 かるゝおはなの浪にたつ也
出る日の影をしるへよななめやる ほとは雲井のみねの白雪
いまよりはよるの衣のうらなくも かさねそめぬる契りかはるな

———実望

(マ)
浪のうきねや志賀の浦千鳥 友まとはせる声そさむけき

きのふみし雪けの雲の今朝はれて みね白妙にあくる山のは
夢うつゝ猶わきかねつことのほも なみたなからにかはすことのは

按察使源俊量

から崎や松のこゝろのさひしさを 友よふ千鳥身にもしるらん
(マ)

(マ)
にたちもわかれぬよこ雲や よそめまかはぬみねの白雪
いへはかねてしりきや新枕 つゐにはかはす中の契を

権中納言藤原元長

とちはてゝ通路^たゆる鳩のうみ 氷のうへに千鳥なく也
ふりそむるひらの高ねの薄雪に 宮この空のいかてたゆらん
恋わひてたえねとおもひし玉の緒の ^今よりおしき新枕かな

兵部卿源重治

志賀の浦や月の氷を鏡にて かけとともなふ千鳥也けり
よそに見しひらの高ねの白雲も 今朝はまかはぬ雪の色哉
逢坂の関越そめて末とをき 心のおくそ人にゆかしき

権中納言藤原宣秀

風さゆるしかのからさき友をなみ 松もひとりと千鳥なくらん
おほひえやいつもみなから富士のねの 面影とをくつもる雪哉
^{手紙}枕をかたしきそむる人よさは わかれてふことをしらせすもかな

———雅俊

(マ)
になれもひとりやからさきの 待夜のつまと千鳥なくらん
うつもるゝ峯のしら雪空晴て 雲はよそなるかつらきの山
行す糸をおもひやそへん限ありて 逢□こよひの恋路なからに

——菅原和長

まのゝ浦こほる入江のしつかにて おはなの波にたつ千鳥哉

真木(マキ)桧原高ねの雲にふりそめて はてはよそめにつもる雪哉

そめし月日も今夜うれしきは さもあらぬ人のかゝらましはや

参議藤原永宣

あま人もくまぬ塩津の浦千鳥 なくねはかりや袖ぬらすらん

かさなると見るもへたてくる峯なれや つもりつもらぬ雪の遠山

今よりの夜かれよいかに年月は うしといひてもまきれにし身を

——左大弁——守光

のさそはれて村千鳥 あくるかた田の浦つたふらん

のみゆきてやとはむとはかりに たゞしら雲の宿の初雪

おもはすよ我あさはかに恨こし 行ふはかりにあひそめんとは

——右近衛権中将藤原公条

しかのうらや浪は氷の松かせにひとりしほれすなく千鳥哉

峯たかみ（ミ）の外になかめやる 袂もすむき雪の色哉」

とし月にくちせぬ袖とかさねても けふのこよひにしく物そなき

藏人頭右中弁藤原尚顕

友なしと千鳥なく也しかのうらや 立（タ）かたらふ波はこほりて

降はれてちかくそみする嶺たかみ 都の外の雪のとを山

つらかりしふしも忘れて逢夜より かはらしとのみ契りをく哉

少納言菅原為学

浪に声をかはしつゝなく千鳥 さそはれゆくやしかのうら風

のたちまかひつゝふる雪の たかねもしるき明かたの空

をいかにちきりてたのまゝし また新枕夢もさためす

藏人頭近衛権中将藤原康親

にほの海や浪の枕のさ夜千鳥 これもうきねのうさはしるらん

見るかうちのうつもれはてゝ大ひえや 小ひえの雪の峯たにもなし

逢ことのかきりもありと今は身の 猶すゑたのむ心とをしれ

左近衛権中将——公音

しかのうらの松やむかしの友千鳥 一木のかけをしる人にして

さゆる殿

夜はをちの高ねにしられけり つもるもふかき雪の光に

行末をまつ契とてつらかりし いろをも見えぬ袖のうへかな

—————隆康

こほりてはよする浪なりしかのうらに たつや千鳥の声もさむけし

(マ)

夜に猶光そふ月影や 雲よりおくのみねのしら雪

おもひあまり我心から見し夢の うつゝにかへる新枕かな

藏人左少弁と伊長

(マ)

のや枕にちかくいそちとり たつ音さむきまのゝ浦風

待わふる宮この空にひきかへて 雪の色そふ遠かたの峯

つれなくて過こしかたのうらみまで こよひなくさむ新枕かな

内藏頭藤原言綱

にほのうみやさえこしよはのうら風に 妻とふ千鳥いつち行らん

春きてはなひくかすみやへたてまし 雲もかさなるみねの白雪

とし月のうさをおもへはかきりありて 逢夜の床も袖はぬれけり

永正四年十一月廿五日 月次和哥御会

堯胤

(マ)

るは又もあふみのあさつまや さのみわかれをなく千鳥哉

(マ)

てるすめはすむ世の外に見し 雲間のみねにつもるしら雪

しめゆひし岡へのわさ田はつかりの かりそめとしもゆめおもふなよ

沙門道永

陰にきて友よふこゑにからさきの 松や千鳥の心しるらん

夕殿

こりのあらしに又やかへらまし 雪にわかるゝみねのよこ雲

(マ)

しある心をたねと初草の うは葉の露やまろひあふらん

沙門道応

(44)
もせぬしほつすかうらかせさえて　からくも波になく千鳥哉
春かすみたちなはみねのおも影も　いく重の雪の下に残らん
此まゝにさむなよ世ゝのちきりまで　はかなくたのむ夢の手枕

――仁悟

風ふけは波のうち出のはまちとり　あとをけされて音をのみそ鳴
踏分て我いらん法の道なれや　そなたにみゆるみねのしら雪
もろともに心を^くきて下ひもの　またうちそ^はぬ新まくら哉

慈運

風さむみしかのからさきこほる日は　浪の立ゐをなくちとりかな
四方に見る山はあれとも大ひえや　宮このふしの雪のおも影
唐衣かへさてみつる今宵たに　夢とかはらてたとる面影
(以下空白)

12 永正四年二月二十五日禁裏月次御会

立春
残氷
原上霞
春浜霞
春洞雪
野宿梅
浦鶯
朝若草^{葉明題}
戸外春風
棧路春雨
春湊月

ふる年ののこる日数もあら玉の　春のひかりに今朝やたつらん
をしかものさえつる声もさむからし　こほるまゝなる春の池水
風さえし安達のまゆみ末つゐに　雪けをこめてかすむ空哉
海人衣かすみの浪にぬれてほす　ひまこそなけれみつの浜松
春あさきほらのかけ草冬かれの　色もたえ／＼のこる白雪
うくひすにかせとはいはし春のゝは　梅こそあるし夕くれの宿
紅もみとりもしらぬ浦浪の　千鳥にかすむうくひすの声
もえいつる色も今より朝な／＼　雪間の草の末のはるかせ
雪消る松の戸ほその山風や　春にあげぬとこゑものときき
打かすむみねのかけはしむす苔の　ころも春雨そふみとりかな
かすみふく浦のみなどのさ夜風に　月の御舟も漕やいつらん

道永
上蘂
実隆
堯胤
季種
宣胤
道応
邦高
季種
実香

(武井和人)

山家柳 浜婦雁 花有遅速 春曉花 春夕花 春夜花 落花未遍 水辺藤 暮春 林首夏 古宅郭公 市々 湖々 舟路卯花 夏草露 樹陰夏風 夏月 初五月雨 嶋蜩 深山泉 雨後蟬 行路夏衣 江上納涼 晩夏 早秋 名所七夕 草花早

朝露も袖にやはらふ青柳の みとりにこもる春の山窓
谷の戸のあくる雲ちに声遠み 峯こす雁の名残をそ思ふ
ちれはさきあまたの種をうつしうへて いくかのとかに花をみつらん
木のまもる有明の月もさく花の 光をそふる春の夜のそら
見すてぬと花な恨そ暮ふかみ 心とゝめてかへる木かけを
下ふしの枕や待し春の夜の くてふの夢も花にとふなり
さそひゆく風をかことに昨日今日 うつろふ花やちりはしむらん
花の色はまきれぬ物を池水の 浪に波あるきしの藤かえ
一とせのくるゝはしめと思ふまにも 春の名残や猶したふらん
昨日見し花の林の面影に あさ露にほふ夏木たちかな
ふりはてしやとゝもいはす橘の ちりはわすれぬほとゝきすかな
市やかたさわく中にも聞人の 心しつけきほとゝきすかな
さゝ浪やかへるもはやきほとゝきす たゝからさきの松の一声
舟人はなれてもしるや月雪の なかめもわかぬ峯の卯花
をのつからうちしけりつゝなひくなり 露をもけにもみゆる夏草
茂るまゝにてる日ももらぬ木かくれは をのつからなる風のすゝしさ
石間月庭の遣水こゆるかと 見るもすゝしき夏の夜の月
降そむる昨日今日たにしひしきに 行末いかに五月雨の空
壅の子の家ぬも遠き嶋陰に ひろはぬ玉と行蜩かな
すゝしさもふかき山辺のかけなれや むすふ泉の水のこゝろは
一とをり過ても雨の木かけより 降音のこす蟬の声／＼
しくれ行こゑもそれかと蟬の羽の ころもにかゝる杜のした露
よせかへりおなしみるめもすゝしさに あかぬほり江の磯の夕浪
川のへや七瀬の御祓一かたに 秋をよせくる浪のすゝしさ
いく度か秋くることもかそへけむ 露をきそむる花の袂に
まれなるもよしや契のすゑの松 まつよりこえぬ天の川浪
秋きては星の名におふ花や先 咲て手向のけふにあふらん

堯胤 実望 元長 貞敦 為広 雅俊 慈運 大納言典侍 宣秀 重治 公条 永宣 守光 康親 尚顕 為学 公音 伊長 隆康 言綱 雅業 実香 道永 為広 宣胤 実隆 邦高

羈旅雁 秋窓鹿 秋枕夢 遠村秋夕 秋宮霧 田家秋雨 秋苑月 閑山月 松宿々 岡竹々 苔徑々 寒庭虫 野擣衣 旅泊紅葉 水郷々々 橋辺菊 暮秋 初冬 閑居落葉 滝辺時雨 故郷寒草 冬里月 杉路霜 冬沢露 海辺冬鶴 岸千鳥 沼水鳥

おもひのみつきすもあるや雁のくる みねのたひねの暁の空
 朝戸出の今そおとろく棹鹿の 野やさむからし庭の草ふし
 見えてさめさめて又見る秋の夜の 夢より後もあけぬ手枕
 いかなれば秋は夕のけふりさへ さひしくなひく遠の山本
 朝ほらけ霧のまかきはくらくとも 神はへたてしかもの宮人
 さひしさはいま一しほの秋なれや 夕の雨の小田のかり庵
 有明のうつろふ比や月草の 花もそのふのかれ／＼の露
 音たかき夜半の滴の山かけに ぬれて更行月の木くらさ
 あらしふく軒はの松の木の間には 雲なき月も晴くもりつゝ
 露霜のをかへの月のさ夜風に 竹のはさやく音もさやけらし
 くらへても山路の苔は露もなし はるかにきてし袖の月影
 霜まよふ庭の小さゝの一むらを たのむかけにも虫や鳴らん
 打音の袖の秋風野をかけて 花すり衣露そみたるゝ
 舟とむるいそ山もとはよる浪の 花も紅葉も浦風そふく
 河水にうつれる影も紅葉ゝの 色をふかむる宇治の山風
 橋にちる露もそひつゝ山水の すゑまで匂ふしらきくの花
 有明の月のひかりも時雨るれば 秋のわかれにうき雲の空
 秋はまたくれて暮なき朝戸出の 初雪見する霜の庭哉
 をく霜の木のはもうへにふるよもき はらふ人なき庵のさむけさ
 よとむまにあらはそわかむ落滝津 しくるゝ音といつれたかけん
 白菊の花こそ霜の故郷を 冬にはあれぬまかきとそ見る
 あれまさる板ま□月の影のみか もるもさむけき里のさ夜風
 梢より先見えそめてをく霜の 色もま□はぬ杉の下道
 水ぬるき沢辺にあをき冬草に 残りてさむき露の色哉
 霜かれにのこる難波のあしたつの かけあらはにもたける寒けさ
 河風にきしうつ浪の声そへて なれもひまなく千鳥なく也
 大かたは氷にかゝる水鳥の いつもの沼かよる瀬なるらん

道応 堯胤 元長 季種 季経 実望 覚胤 為広 雅俊 上藤 貞敦 言綱 永宣 慈運 宣秀 守光 実香 宣胤 実隆 道永 伊長 季種 道応 雅俊 大納言典侍 堯胤

芦辺氷
 水路新雪
 冬池雪
 峯樹深雪
 歳暮
 春恋
 夏恋
 秋恋
 冬恋
 寄山恋
 寄水恋
 関路雲
 古渡雨
 寄杜旅
 薄暮煙
 山家灯
 古寺松
 河辺鷺

難波江やかれ葉のあしのそよ更に 浪はこほりて音たにもなし
 水さむき波ともみえて岸陰に 雪降そむる川そひの道
 つもりつゝ雪もこほりてうす氷 あつくなり行池の面影
 嶺の松はらふまでこそつもありえは 雪にしつまるさ夜の山風
 行年をさのみしたはゝ身ひとつの またぬ春とや春はうらみん
 花に人ちりなむ後もかはらすは 春をちきりにうらみさらまし
 もえ出る草のはつかにをく露の 袖の色とはいつなりにけん
 あたなりと人は見るとも花心 うつろふまでをちきりとみん
 こやにたくかやりのけふりそれよりも むせふ思ひそやるかたもなき
 ほたるにもあらぬおもひはさ夜衣 つゝみてみせむ物としもなし
 大かたの秋たにあるに我袖は おもひのかすの露よなみたよ
 なかき夜のはやふけ過て今はたゝ 猶身に秋のつらさをそしる
 月もしたのめぬよはの袖にたに ふけ行影はしたふならひを
 水鳥のうきねもかなし片敷の 袖のしほりのむすほゝれつゝ
 霜さゆる我ひとりねにむねましき をしのふすまそ見るかひもなき
 つれもなき世ゝの思ひの煙もや 名にたつ恋の山となるらん
 行かへるおもひもくるし夢にたに 枕かはさぬさ夜の中山
 心よりおもひ入ぬる恋の山 身はまよふとて誰かとふへき
 よそに見てわたらぬ程はおもひ川 ふかさあさゝよいかにしらまし
 うき契われはむすはて忘めの 水のこゝろを人やくむらん
 すゝか山きりの丸橋すゑかけて 雲の一すちの関のした道
 すみた河水かさそひきてふる雨に 舟の行ゑも見えぬ比かな
 引ふるも心にのるや路ならん つかれし駒のあしふきの杜
 山めくる麓の里の夕けふり 吹しく風のすゑを見えけり
 山ふかみまた夜を残す人もあれや 月より後の灯の影
 心すむ暁月のたかのやま 一つをかさらに松風のこゑ
 雲ゐにも秋やこふらし星川の わたりに遠きかさゝきの声

雅業
 宣秀
 元長
 覚胤
 康親
 永宣
 守光
 上臈
 実隆
 邦高
 尚顯
 隆康
 公条
 重治
 道永
 公音
 貞敦
 実望
 雅俊
 為広
 慈運
 為広
 邦高
 堯胤
 覚胤

海懷旧
曉神祇
夜釈教
名所述懷

うらみても帰るをみれは大よとの 浪にもかなやこふる昔は
くもりなき光を君にゆつりても 猶有明の月よみの宮
閑伽の水花さく時をくみなれて 法のこゝろも今やひらけん
あまりある君かめくみをみかさ山 さしてなけかしうき身なりとも
身は老の坂こゆるまでおとこ山 たのむ心を忘れさらなむ
人なみにちるもはつかし住の江や 玉をもしらぬ松のことのは
いつまでか残るなからの橋はしら 今はなのみ跡かひもなし
いつはあれと秋にそおもひをはすての 名におふ月の影よいかにと

(一行分空白)

永正四年十二月廿五日 勅題

(以下空白)

(片面空白)

実隆
宣胤
道応
実香
重治
季経
大納言典侍
為学

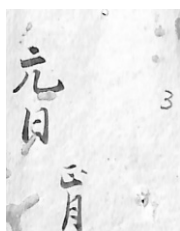
(武井和人)

【略解題】

小論で底本としたのは、武井蔵本（以下架蔵本）である。該本の書誌は以下の通り。

袋綴装（改装）一冊。表紙（改装後のもの歟）は厚手の楮紙、青地二重複丸唐草文。縦二五・糲、横一九・一糲。外題・内題ともに存しない。紙数は、首部遊紙一丁。墨付①、四八丁。中間部遊紙二丁。墨付②、四三丁。尾部遊紙ナシ。本文料紙は、やや厚手の楮紙。半面一五行、和歌一首一行書。奥書・識語・蔵書印等、すべて存しない。書写年代は江戸前期写（後掲『臥遊堂沽価書目 参号』は江戸中期とする）。虫損が甚だしいが、裏打ちが全冊にわたって施されてゐる（近代にてなされたものであらう）。改装時、料紙右上隅に鉛筆書きにて、丁数が書かれてゐる（『図版A』参照）。

『図版A』※鉛筆書（「3」）の丁数（墨付第一丁表右上隅）



『臥遊堂沽価書目 参号』（二〇一八・一二）所掲（第四九号典籍）。なほ、前述の通り、架蔵本に外題・内題は存しない。そこで便宜、同書目における書名「月次和歌御会」を以てすることとした。三度の歌会資料が収められてゐる。

墨付①―④

《宝徳三年幕府月次歌会》

正月より六月まで。

墨付第一丁表〜第二一丁表（第二一丁裏は白紙）

墨付①―④

《文明十三年禁裏月次歌会》

文明一三年正月より翌一四年三月まで。

墨付第二二丁表〜四八丁表

墨付②―④

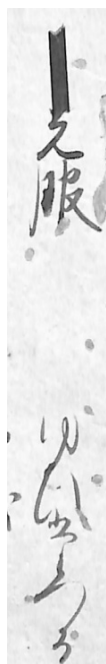
《永正四年禁裏月次御会》

永正四年正月より十二月まで。

墨付第四九丁表〜九二丁表（第九二丁裏は白紙）

墨付①―④にのみ、四ヶ所（正月・二月御会、兼良詠のみ）、歌題龍頭に藍色小紙片が貼付される（『図版B』参照）。

『図版B』※正月御会、兼良詠（墨付第三丁裏）



田中登氏旧蔵（後文にて詳述）。

次に、所収される個々の歌会について、略述しておく。

墨付①―④《宝徳三年幕府月次歌会》

これらの歌会については、井上宗雄「室町前期歌書伝本書目稿」〔『中世歌壇史の研究 室町前期（改訂新版）』に以下のやうに見える。

宝徳三年 一四五 辛未

正月28 幕府月次歌会 公宴続歌5・無外題一冊本（田中登氏蔵）

「元日」以下 御製・貞常・義成・兼良・義運・雅親・祐雅・実雅・増運・浄空・資任・公綱・永豊・持為・雅親・勝光・為富・教国・勝元・賢良・教親・成之・道賢・常忻・成賢・勝豊・勝之・堯孝・元家・貞運・貞親・貞藤（年次不記。二首目の「さえかへる雲の衣に立そひて霞の袖も雪はらふなり」が後大通院との御

詠Ⅱ貞常親王Ⅱ一八七に「室町殿詠草」
みえ（以下、年月日・催行場所が分る）（以下全て百首。作者もほぼ同）

二月27 幕府月次歌会 同前 「早春」以下

三月27 同前 同前 「山中桜」以下

四月17 同前 同前 「歳中立春」以下

五月 同前 同前 「立春」以下

六月27 同前 同前 「早春霞」以下（前掲書・五九二頁・上段）

井上が指摘するやうに、架蔵本に収められる歌会資料は、『公宴統歌』に見え、和泉書院版の歌番号で示すと、〇一七三四〇二二二に相当する。

『公宴統歌』と架蔵本は、以下の点で一致する（田中氏蔵無外題本に關しては後に述べることとする）。

①正月から六月までの歌会資料を収める。

②月のみが記載され、年の記載が存しない。

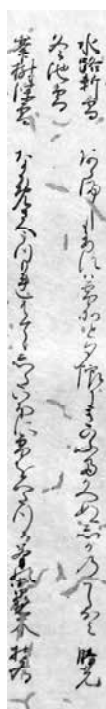
従つて、この両本は、同一祖本より分かれ出たものと考へられさうであるが、かう考へるには一つ問題がある。

『公宴統歌』二一八九〇番歌は、以下のやうになつてゐる。

氷路新雪 あらましも……しかのうら波 勝光

嶺樹深雪 なかめさへ……峯のときは木 持為

この部分を架蔵本で示すと、



このやうに、両歌の間に、歌は存しないものの「冬池雪」題が分つて入つてゐる。両歌が詠じられた五月歌会は、『公宴統歌』では九九首、百首に一首足りない。その意味で、架蔵本の形はありうべきものである。

何らかの事情で、冬池雪題歌は詠じられなかったのだらう。

このことから考へて、両本の祖本は一つであつたらうことまでは否まないが、『公宴統歌』の形態を清書本、架蔵本を原態本と見做せようか。そこまで踏み込まずとも、架蔵本（の直接の祖本）の書写態度に、より原型を保存しようとする意識があつたらうことは、想像に難くない。

墨付①⑤《文明十三〃十四年禁裏月次歌会》

これらの歌会について、井上宗雄「室町前期歌書伝本書目稿」に以下のやうに見える。

文明十三年 一四八 辛丑

正月18 内裏月次始 公宴統歌7・内裏月次五十首御統歌（京大研

究室・史料編纂所）・内裏五十首（大阪市大）・田中登氏蔵無外

題「初春」以下 御製・勝仁・義政・邦高・一位殿・覚恵・道

永・持通・尊応・義尚・旧院上臈・妙法院・禅空・信量・勾当内

侍・栄雅・増運・為富・教秀・親長・公躬・実隆・雅康・基綱・

為広・政資・雅俊（五十首、雅俊題。（以下略））

二月〃十二月 内裏月次（上掲、公宴統歌7・京大研・史料編纂所

・大阪市大・田中登氏本による）〇二月18（以下略）

（前掲書・六〇二頁下段）

文明十四年 一四八 壬寅

正月18 内裏月次始 公宴統歌7・田中登氏蔵無外題「立春」以

下 御製・勝仁・邦高・義政・道永・堯胤・一位殿・旧院上臈・

尊応・道興・持通・義尚・増運・禅空・栄雅・信量・冬良・為富

・教秀・勾当内侍・親長・雅康・実隆・基綱・為広・政資・雅俊

（五十首以下。勅題）

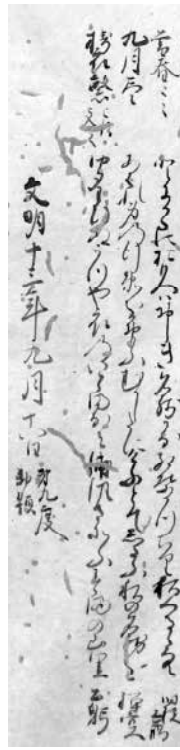
二月18 内裏月次 同前 「歳中立春」（以下略）

三月18 内裏月次 同前 「春朝」以下（以下略）

〔前掲書・六〇四頁上段〕

この両歌会においても、『公宴統歌』と収める歌会資料は一致するのだが（文明一三年禁裏御会Ⅱ〇三四〇二〜〇三九五、文明一四年禁裏御会Ⅱ〇四〇〇二〜〇四一五一）、子細に見て行くと、看過出来ない相違点がやはり見出せるのである。

文明十三年九月十八日月次御会の末尾、架蔵本では次のやうになつてゐる。



「擣衣繁」題の下の割注は読みにくいが、「已後／被入之」と仮に読んでおく。この読みで良いとすれば、当該歌は、後日補入されたことが分る。この公躬歌、『公宴統歌』では、しかるべき場所に置かれ直してゐる。

擣衣幽

道永

ふくるよに波も衣もうつ音や秋風とをき玉川のさと（三八三五）

擣衣繁

公躬

きゝ侘ぬうつや衣のいとまなみ浦かせさそふすまのやま里（三八三六）

松虫

実隆

浅ち原みとりすくなき秋風にねさへかれゆく野辺の松虫（三九三七）
管見に入つた以下の二本においても、『公宴統歌』と同様の本文を持つ。

・京都大学文学研究科図書館国文学研究室蔵『内裏月次五十首御讀哥』（Eu／ハ a）

・東京大学史料編纂所蔵（阿波国文庫旧蔵）『内裏月次五十首御統讀

〔四一三一―二四〕

ここでも、架蔵本の「原態」性を指摘することが出来る。

墨付②―③《永正四年禁裏月次御会》

これらの歌会に関しては、井上宗雄「室町後期歌書伝本書目稿」（『中世歌壇史の研究 室町後期（改訂新版）』）に、以下のやうに見える。

永正四年 一五〇七 丁卯

正月19 御会始 一人三臣和歌 梅有佳色

二月〜十二月 宮中月次 一人三臣和歌 二月（勅題。短冊^欠）・

三月（懷紙）・四月（題者為広。短冊）・五月（懷紙）・六月（題

者政為。短冊）・七月（短冊）・八月（勅題。短冊^欠）・九月（懷

紙）・十月（題者雅俊。短冊）・十一月（懷紙）・十二月（勅題。

短冊^欠）。年の末尾に「為広卿毎々同躰之由満于人口閑」とある。

六月分は「永正六年和歌」（書陵部）・「禁裏御着到和歌^{永正六}

年」（彰考館）にあり（五月とあるが、六月の誤り。「春たつ日」

^{高邦}以下抄出か）、七月・九月分も同上両者及び続撰吟抄にあり。

但しいずれも抄出（補注2）（前掲書・七三八頁上段〜下段）

（七三八頁）補注2）永正四年宮中月次歌は、田中登「無題」（多

くは文明十三年、四年、永正四年月次歌の集）には、正月十九日

分は僧のみ、二〜十二月分は全歌を収める。（前掲書・八八四頁

下段）

井上が説く如く、永正四年の禁裏月次御会和歌の詠の内、後柏原院・実隆・政為・為広の分に關しては、『一人三臣和歌』に抄出されてゐる。しかし、それ以外の詠進歌に關しては、六月・七月・九月分が、宮内庁書陵部図書寮文庫蔵『禁裏著到法樂御会和歌』（二〇六・八三三）（井上のいふ「永正六年和歌」、彰考館蔵『禁裏御着到和歌』（巳一〇・〇七一―二五）、『続撰吟抄』等に抄出されるものの、完全な形で残るのは、田

中登氏蔵「無題」と、架蔵本のみ、といふことになる。本論に墨付②―
◎《永正四年禁裏月次御会》の部分に翻刻した所以である。

なほこれも井上が説く如く、田中登氏蔵「無題」と架蔵本は、正月分
に關してのみ、僧侶歌のみの抄出である。そこで、『一人三臣和歌』よ
り補つておく。

永正四年正月十九日

梅有佳色

朝かすみ咲いつる梅の一はなも 色香にあまる四方の春風

前内大臣
正二位実隆

咲からに色もにほひも凝はなの 名にたかゝれや九重の春

藤原公純

色そへて君みるへくは梅の花 はなのはるてふ初にそ咲

民部卿藤原為広

先さくや千とせの春の色ならん 君かかさに匂ふ梅かゝ

※武井・酒井茂幸・山本「国立歴史民俗博物館蔵高松宮本『一人三
臣和歌』―釈文・略解題―」（『埼玉大学紀要 教養学部』五〇―

二、二〇一五・三）による。底本は、国立歴史民俗博物館高松宮

本『一人三臣和歌』（H一六〇〇一七一二）。引用に際して、レイ
アウトを改めた。

○

ここで、田中登氏蔵「無外題」本と、架蔵本との關係について述べて
おく必要があらう。所収される和歌も同一、外題が存しない点も同じ。
そこで非礼を顧みず、田中氏に事情をお尋ねしたところ、近年、該書を
手放された由。従つて、

田中登氏蔵「無外題」本＝架蔵本

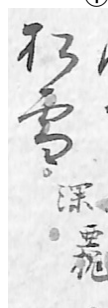
と断じて良いことになった。

○

最後に、架蔵本書写者の書入れについて述べておきたい。

架蔵本にはまま、親本における物理的欠損についての注記と覚しき書
入れが存する。

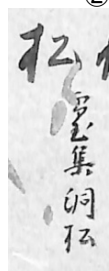
それ以外に、本文そのものについての他文献との比較による校勘記と
覚しき書入れが、数は少ないながらも存する。



① ※墨付①―◎《文明十三年正月年禁裏月次歌会》榮雅詠

これは、親本に「松雪」とあるものの、榮雅（雅親）の家集『亜槐集』
には「松雪深」とあり、そちらの方が正しからう、との指摘である。

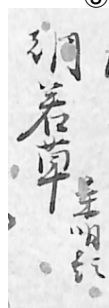
事実『亜槐集』では「松雪深」に作る（新編国歌大観・亜槐集・七八
二、新編私家集大成・雅親Ⅲ・七九四）。



② ※墨付②―◎《永正四年十月禁裏月次御会》実隆詠

これは、親本に「松」とのみあるものの、実隆の家集『雪玉集』には
「洞松」とあり、そちらの方が正しからう、との指摘である。

事実『雪玉集』では「洞雪」に作る（新編国歌大観・雪玉集・二二五
一、新編私家集大成・実隆Ⅱ・二二五三）。なほ、『再昌』も「洞松」と
する（新編私家集大成・実隆Ⅰ・一一五九）。



③ ※墨付②―◎《永正四年十二月禁裏月次御会》道応詠

これは、親本に「朝若草」とあるものの、『明題』には「朝若菜」と

あり、そちらの方が正しからう、との指摘である。

この『明題』であるが、恐らく『明題部類抄』のことを指してゐるのであらう。まづそのことを確定しておきたい。

本月次御会の歌題を、春部のみまとめてみると、次のやうになる。

立春 残氷 原上霞 春浜霞 春洞雪 野宿梅 浦鶯 朝若草

戸外春風 棧路春雨 春湊月 山家柳 浜帰雁 花有遅速 春曉花

春夕花 春夜花 水辺藤 暮春

この組題に相当する百首題を『明題部類抄』で検すると、「百首年記可勘注」之「九条内大臣家」がほぼそれに合致する。いま慶安三年刊本を以て、同じ春部の歌題を引いてみると、

立春 残氷 春洞雪 原上霞 春浜霞 野宿梅 浦鶯 朝若菜 戸

外春風 棧路春雨 春湊月 山家柳 溪帰雁 花有遅速 春曉花

春夕花 春夜花 落花未遍 水辺藤 暮春

(新典社叢書本による。同書・一六六頁)

となつてゐて、若干の出入りはあるものの、同一組題と見て良いだらう。また、夏部以下の組題もほぼ一致する。

しかし、注記を施した某が、どの『明題部類抄』を参考したのかといふことを考へるに際しては、若干の注意を要する。

『明題部類抄』の諸本に関しては、井上宗雄『明題部類抄』をめぐって―中世成立の歌題集成書の考察―(『国文学研究』一〇二、一九九〇・一〇)井上『鎌倉時代歌人伝の研究』(『風間書房』一九九七・三三)が詳細に論ずる。井上の諸本分類に従ひ、管見にたまたま入った伝本の本文における当該箇所を示してみる。

第一類(1)

・宮内庁書陵部図書寮文庫蔵本〔五〇九・七〕※伝為重筆

「朝若草」

第一類(2)

・宮内庁書陵部図書寮文庫蔵本〔四〇五・一二五〕※江戸写
「朝若菜」

第二類

・肥前島原松平文庫蔵本〔一一七・九七〕※江戸写

「朝若菜」

・慶安三年刊本 ※新典社叢書本による

「朝若菜」

第三類

・東京大学史料編纂所蔵本〔四一三一・一六〕※江戸写

「朝若菜」

・丹波篠山市立青山歴史村蔵「明題抄」〔三五二〕※江戸写

「朝若菜」

このやうに、伝為重筆本を除く諸本は、架蔵本注記と同じく「若菜」に作る。恐らく、注記を施した某は、机辺に存した、江戸期広く流布してゐたであらう『明題部類抄』のある一本を以て校勘したのであらう。しかし念のためにいつておけば、だからといつて、本歌会における本文として「若菜」が原型である、とは断ぜられない。

何故ならば、当該道応歌を見てみると、

もえいつる色も今より朝な／＼ 雪間の草の末のはるかせ

といふものであり、「若草」の方が和歌表現との対応といふ点から見て、より自然だからである。

(武井和人)

詠梅有佳色和可

元胤

保元名物并中興希里奴身奉利色已留おれ金尚也契ら拜

沙門道永

金彩をまきうけいさめり外々せのまのふり

覚流

代をまき者いれいさめり外々をまき者いれ

沙門道應

ふりていさめり外々をまき者いれ

仁悟

いさめり外々をまき者いれ

慈運

いさめり外々をまき者いれ